らである。考へて見ると、臺灣の事業界も心細い次第であるまいか。如何に、臺灣に新人物が擡出しても、内地と臺灣との間を、巧みに聯結しても、恁んな冷淡な事業家が、内地に居た日にや、臺灣事業界の將來が想ひやらるのである。吾人は、臺灣に、百の木下新三郎があるより、内地の人で、臺灣事業界に關係ある人が、夏季の臺灣へ來て、此臺灣の自然と、人事を初めて見る眼で、正直に見る事を切望する。

『二十三』疑問の阿里山

帝國議會で、一度問題になつて、議場に花を咲かせて以來、阿里山なる名詞は、頓に中央的になつた。又其れ以來、疑問の山になつた。何とか云ふ代議士は、例の蛙會の運座に、阿里山霞む何とか云ふ俳句迄唸つた事がある。臺灣でも、新高山は一番早く内地人に知られたから、臺灣で、富士山よりも高い新高山といへば、大抵の者は知つて居たが、阿里山に至ては、已に發見されても政治上の問題になり、果ては文學上に迄飛んで問題になる迄、餘り多くの人に名を記憶されずに居た。

世界で有數な美しい林相の阿里山

實際阿里山の針葉樹林は、世界でも有數なる、美しい林相で、且つ廣大なものである。頃日初めて、臺灣へ行つて、始めて臺灣の林相を見た白澤林學博士の如きは『阿里山に紅檜の豐富なるは、頗る奇異に堪へず、而して、又同山の天然林として、世界に有數なるに對しても、賞贊の辭を惜まざるなり。猶檜の成育の良好なる事は、到底内地に在りて、想像も及ばざる所にして、現今陸軍に於ける砲車材料として、研究上、世界唯一と目せらるゝ内地産の檜が、逐年減少の傾向あれば、若し本島にして、同省希望通りの材積を得られるものとせば、如何なる高價にも甘んじて、之を購入するに至るべし』と、頻りに激賞し、又阿里山を見た眼を、更に木曾

長官の比較したる木曾と阿里山

御料林に轉じて、阿里山に比較した、內田民政長官も、『木曾は檜の分量は、恰んと無盡藏と稱されて居ても、御料林に歸して以來伐採に伴ひ、殖林にも注意を拂はる、臺灣にても、相當の年限を以て輪伐の計劃を立つ樹木の伸長程度に相違あり、木曾の方は、百年乃至二百年を輪伐期とするも、臺灣は四五十年の見込なり。臺灣の森林にては、高所にのみ檜を見るも、木曾は低地にも檜あり、尤も林積よりいへば、臺灣には非常に大木ありて、直徑二十數尺周圍六十餘尺のものあれど、御料林には斯る大樹なし(中略)木曾にては山落し、小谷狩等、主として、天然の溪水、及、地勢を利用すれども、人夫を要する點も亦少からず。然るに、臺灣阿里山にては、主として機械力を應用して運材を爲し、巨額の木材をして世間の需要に應じて、相當の供給を爲さしむるには、鐵道の便に依るを最上とす。輕便鐵道も亦利用すべきものなり、木曾山林より、一年の伐出材積十五

阿里山の伐採木材は木曾と略ぼ同額

六萬尺なるが、臺灣も、亦當初は雜木を除けば、檜材は先つ同額位ならん。阿里山材は、內地需要の程度を考へ、內地市況を亂さざる樣有利に、內地へも供給せらるべき方針也』といつて居る如く、本四十五年度には、此經營費として、三ヶ年繼續事業の年割額二百萬圓を、其れに投ずる事になつて居る。其うして、此木材運搬の爲に專用する鐵道工事の爲、二百八萬八千六百六十六圓を使用する豫算か立つて居る。此鐵道の延長線か四十一哩、之か又三年計劃になつて居る。兎に角、廉價で、良質の木材が、どし〳〵內地の市場に現れる事だから、臺灣に取つても都合かよければ、內地に取つても都合のよい事で、いはゞ臺灣總督府が、無盡藏の寶庫を所有して居るやうなものである。

阿里山材に對する風說

處が、世の中と云ふものは、其うゝ都合のよい事ばかりはないもので、阿里山から切り出そうとする木材に就いては、夙くから一種の風說が

阿里山村はくるひ島い

ある。つまり、檜其ものに對する非難の聲である。或人は之を中村彌六の說だと云ふが、先つ其れは何れにしてもよいが、第一阿里山の赤檜は、檜の香がしなくて、質が脆弱で、建築用材料として、內地の如き、臺灣より も寒冷の地へ來ると、木性にくるひが生じ、隨て、內地檜と、市場で角逐する如き成績が擧らんから、長官のいふ『內地市場を亂さざるやう有利に、內地へも供給せらるべき方針也』は、寧ろ杞憂に過ぎん事だ。第二に、阿里山の檜は、一般內地の檜よりも、生長する年月が非常に早い、早いからして木理が緻密でない、緻密でないから、硬度を缺く點が遂にくるひを生じ易くなるのである。第三、阿里山檜には、木曾御料林の檜の如く、伐つた其れを山から落して、溪流を利用し得られない。材木特有の性として、市場へ出て、愈々建築材料として、使用せらるゝ迄には、伐つてから、尙多少の年月と、流水に投せられて居る時間かなくてならんものだ

水利のない阿里山村

そうだ。阿里山には其れか先つ缺けて居る。其れを內田民政長官が『巨額の木材をして、世間の需要に應じて、相當の供給を爲さしむるには鐵道の便に依るを最上とす』といはれたが、此鐵道といふのが、卽ち阿里山鐵道で、水に流す便かないから、餘儀なく鐵道に依る事にしたのを、斯樣に公言する處を見ると、事情を知つて居てわざ、と言はんのか、言つては阿里山材の爲不爲になるからだか其れ迄は分らんが、兎に角無責任極まる言である。同じ阿里山系の山でも、現に藤田組の櫟大山になると多少共に水利を伐り出しに利用しつゝある。阿里山に至つては、長官のいふ鐵道に依るより他に、全く致方がない。第四、阿里山の檜の性質が右の通りで、阿里山檜の用途が、頗る危ながしいもので、あれ丈の大設備をして、果して收支が償ひ得るかどうか。第五、聞く處に據れば、臺灣總督府は、此伐り出した材木を、內地と、對岸の南淸に販路を求むべ

官營木材會社設立の噂

く、阿里山作業所自らが、商人に賣るのが變だ故、近く官營から成る、阿里山木材會社とか云ふ、一種の妙な會社を拵へ、之が社長として、某高等官を任命する噂があると傳へられて居る。之を、亦、臺灣總督府阿里山作業所の顧問である、河合林學博士は、頻りに打消して、殊に五つから成る疑問の如きは、皆杞憂に過ぎんといつてるが、爭ふべからざる、民間の衆口は、どうしても大學派の林學博士や、臺灣總督府で言明する處を信じないから、此疑問の焦點たる阿里山檜が、內地市場に現れる時が、疑問の解決期になるであらう。

「二十四」　大仕掛なる理蕃事業

理蕃事業といつた丈では、內地人の頭へ、當事者の思ふ程響かない。其處で、內地向き特別の言葉でいへ換へれば、生蕃討伐になる。其蕃族が、臺灣には十二萬餘人もあつて、之が兇暴極まるアタイヤル族を始め八

族の分布區域に至つては、千二百方里、全島十分の六を生蕃族に占められて居る都合になる。其處で既往の第一期、第二期に於て得たる討蕃經驗を基礎とし、來る四十七年度迄に、全島の兇蕃に對する大討伐を開始したのが今の討蕃事業である。此蕃界勤務に服する獨立警察隊が六千八百餘人に及び、之を以て二百有餘里に亘る隘勇線を拵へたり、從來のは前進せしめたり、此間々の要衝の地へは、道路を開き、大小の蕃務駐在所を置き、先つ第一年度には、宜蘭廳下、大濁水溪岸から、ゴーゴッ社に至る六里の間と、圓山監督所から濁水溪に沿ふたボンボン溪口を經て分水嶺に至る方面から始めて、附近の諸社を脅かし、其うして新竹廳六畜山頂より、更に桃園廳の進出線に合する四里半の間に警戒線を布いて討伐し、第二年度には、同じく宣蘭廳大濁水溪から海岸に沿ふて、新竹廳、花蓮港廳の領域なるサンサン溪口に迄討伐の警戒線を伸ばし、第

三年度には、南投廳三角峯から合歡山頂に至る四里の間及、宜蘭廳に合する花蓮港のサンサン溪口、大清水溪の南に亘り、第四年度には、花蓮港タモナン監督所から、木瓜溪を溯つて、バトラン社から、南投の進出線、總計七十里半に隘勇線を張つて攻撃する、其れが、もう恰度半に達して居るのに、尙、未た豫定通の成績か上らない。此高等官衙としては、常務警察から放れて、別に蕃務本署なるものが、臺灣總督の直轄になつて、其上軍隊の後援力のあるに拘はらず、蕃人の狙撃、若くは不意撃ちに罹つて蕃討隊の戰傷者か頻々と出る。士氣か沮喪するとか云ふので、此情況か、亦內地新聞は勿論、島內の新聞にすら正直に報道する事か出來ぬ。又後援の爲、軍隊が時に出動してすら、出動など云ふ文字を使はせないで、只山地行軍と書かせて置く。此理由の半面には、又々軍隊の力を藉りたといはれては、中央政府の聞いかわるいとか云ふ懸念もあるそう

戰傷者續々たる蕃討隊

山地行軍は軍隊出動の別名

だ。其ういふ次第で、千里も千里以上も鄕里を放れた蕃界の山中で野獸に等しい生蕃に首を斬られて死んだ、名譽ある國の殉難者の功績が、樣の下の力餅的になつてしまう。何の事はない、生蕃討伐は、蓋をした、人の見ない穴の中で仕事をしてゐるやうなものだ。一々其情報を內地地聞へ打電するにしても、何日も〳〵定りきつた文句を、きまりきつた方法で報道するより過ぎん。其れが、臺灣總督府の御用電報だから驚くのだ。此んな譯だから、いくら蕃界巡査を內地で募つて來ても、討蕃は捗らず、巡査は人夫や隘勇と共に戰死する、其うして、人知れない、尊き犧牲をどれ丈拂つて居るか分らない。如何にも、今の隘勇線の設備は完全なものかも知れん。所々の要所に監督所があつて、所々の要點に砲か据ゑてあつて、蕃族か現れたか最後、此火蓋を切つて放つのだから、理窟からいへば、砲を持たない蕃族討伐は何でもないやうであるが、

人知れぬ尊き犧牲

さて實際を見ると、却々そうでない。慓悍なる渠れ等になると、樹木や、草生の中を巧みに潜行して、此處に三人、彼處に五人といふ如く、一齊に砲臺下へ肉薄する距離迄進んでは、其監督所を奇襲する、奇襲されたか最後、隘勇線は渠れ等の爲、見るも痛ましい目に遭つて、屹度五人や、十人の戰傷者を拵へて渠れ等の一人すら傷けもしえず、捉へ得ない事がある。恁うなつて來ると、如何に熱心に從事して呉れても、討蕃隊の無能を絶叫しなくては居られない。

之か、軍隊であると、將校の下に下士があつて、下に兵卒があつて、其兵卒が戰さもすれば、輜重もするといふ如く、手數が要らんのに、之には隊長である蕃務の警視なんぞの下に、警部が居て、警部補が居て、巡査が居て、其下に人夫が居る、土人から隘勇も居る。つまりいふと、巡査と、人夫と隘勇と一つにしたものが、軍隊だと一人で、又其れで十分何事でも出來

るだ。今の討蕃に於ける、隘勇線では、經費からいつても、最も不經濟なお祭り騒ぎ的警戒を敢てなしつゝあるが、此丈の人數の居る一方に、絶えて、肉薄された時の用意などを立ててないやうだ。さればといつて直に軍隊的戰術を、渠れ等に應用する事も出來ん。蕃人には蕃人戰術なるものがある、之は蕃通でなければ分らない。新竹の家永廳長は、ポンプで石油を渠れ等の集團地へ送つて、其れへ火を放つて焚く事を當局へ提案した事があるそうだが、思ひつき丈はいゝが是では蕃界の生産物迄が滅茶滅茶になる怖れがある。かの前年の宜蘭討伐に軍隊を用ゐ、一ケ中隊全滅の慘狀を見た上、全討伐隊が散々敗北した末に、漸くボンボン山占領の勝利を得たから考へ見ても、軍隊を以ての討伐は考へたのだ。丈なす雜草の荊棘が交つて、其れが谷を埋め、路を埋め、地形の不整一なる內地の山間の如きでない蕃山には斥候が第一に用をなさ

効果の鈍い蕃人懷柔策

ぬ事になる。若し強いて之を行へば、徒らに渠等の銃彈の標的になる位が落ちだ。故に、此完成を期すには、今のやうなお祭り騒ぎでない、遠戰を主とする許でない、白兵戰を主とする備へも必要なれば、もつと冗員陶汰の必要もあるだらう。五十人も、百人も居る處へ、十五名か二十名の生蕃が飛び込んだに錯愕する今のやうな狀では前途が心細くてならぬ。武器を取り上げて、恩を與へて、其うして懷柔を行ふといふのが今の治蕃策だが、攻めつけといて窮したのを見ては、銃を出せ〳〵と迫つて、銃を悉皆取り上げる、其れを臺北なり、附近なりの市街に連れ來て、文明の難有さを見せた上、物品を與へたり、何んかする事もわるいではないけれど、此効果が餘りないのに呆れ返らざるを得ない。蕃地を荒らさないで、生靈を苦しめないで、もつと早く理蕃成績を擧げるには、此際根本的研究が必要であらう。例へば、軍隊戰術の長所へ、經驗から得

軍事思想の戰術無思想な巡査

た討蕃戰術を加味し、其うして此等を無手にして、膺懲する方法の如き、簡便法を大に講究すべき餘地があるでないか、四年計畫の討蕃や、五年計畫の討蕃で、理蕃の完成を期すのは、百年河清を俟つと同日の論である。砲の操法を辛うじて會得し、衣食の爲に蕃界巡査を志願し、軍隊的智識の皆無なる、戰術思想の皆無なる巡査や、隘勇や、警部や、警視位の只從來の經驗戰術を頼む者にばかり臺灣總督府の、一大事業を任せ置くのは不心得千萬である。今の分で見ると、四年なり、五年なりの先づ計畫を立て、討蕃中は、蕃界勤務の者一同が、內地勤務の巡査に得られない處の手當や、何ぞで無事太平に暮し行ける譯だ。此くの如き者の爲として見ると、今の理蕃事業は、一種の無職業者に對する救濟事業とも受取れる。隨て其ういふ輩の米櫃にも受取れる。隨て生蕃は、彼等に取つての大明神樣々々でなければならんのだ。もつと皮肉にいへば、生蕃

今の討蕃ばは穴中の仕事

を早く片づけては、彼れ等が、飯の食ひあげになる譯だ。だから、人の見解に依つては、之が爲、わざ〳〵理蕃事業を長びかせるのだともいひ得るのだ。何にしても、金が掛つて、人力を費し、人の生命を失ふ割合に、世間に榮えない穴中の仕事のやうに見えて居る。其れかといつて、理蕃事業を華々しくやれとはいはん、只勞少くして、時間少くして、經費少くして、もつと早く効果の擧がる方法が、今日ないかと云ふ心配をするのである。

名譽の戰傷は條の下の力持

第一最も氣の毒に堪えないのは、日露戰爭か、日清戰爭なれば、麗々と寫眞を掲げ、功績を述べ、忠勇無双の戰死者であるとか、又は勇敢なる血戰をしたとか、其一擧一動が天下に知れ渡るのに、臺灣の蕃界で、生蕃相手の戰傷では、只單に、內地地聞の電報欄へ六號活字位で『昨夜何時頃、敵蕃數名許何監督所へ襲來巡査一隊勇三戰死せり』位が關の山、前にもいつた如く、全く様の下の力持的になつて、貴重な生命を蕃山の露の中へ消えさしてしまう。此等の事は、今の理蕃政策改善に依て、いくらでも改めうる事だ。

進歩も發展もない現在の狀況

新聞紙といふよりも半官報

『二十七』骨拔きになりし臺灣の新聞

現在の臺灣には、新聞紙が三種ばかり殘つて居る。其第一をいへば、無論臺北に在る處の、株式會社臺灣日々新報社で、臺南の臺南新報が之に次ぐ。臺中の臺灣新聞に至つては、第三位になるやうだ。何にしても競爭も、進歩も、發展もない、現在の狀況で、見るからに、どれも〳〵活氣がない。只、單に天下太平を謳歌する御用紙としては、あれでいいかも知れんが何處となく、其報道の筆端に、戰々兢々たる態度もあれば、只管壓迫を恐れ、忌諱を怖れ、言論の自由を自分で狹ばめ居るといふ如き觀がある。

骨拔きになりし臺灣の新聞

怎うなつて來ると、新聞紙といふよりも、半官報の意味に受取れ

無冠の宰相の實も何もあつたものでない

る。其れか、あらぬか、臺灣の新聞記者は、官吏のやうであると評判されて居る。是れは又事實致方のない事で、總督府民政部の文書課員などは、臺灣日々新報社々員を、自分の奉公人でもある如く待遇する。又記者に十分の抱負や、識見があるにしても、其れは紙上に現はし得ないのが現狀だ。只現在の臺灣の新聞記者は洋服を着て、乃至は袴を穿いて、ノートと、鉛筆を持つて役所々々の分課や、官營の銀行や、學校や會社の如きものを廻り歩いて、當局者の書いたもの、若くは語る處を筆記し廻るにしか過ぎんのだ。稱して之を記者の外交といつてるが、外交の實なんか、藥にしたくもない。判任四級か、五級の驕慢な小官吏にお世辭を振り蒔いては、僅に其材料を供給して貰うのだ。其上、一字間違つたといつちや、呼びつけて叱られ、意味を取り違ひたといつちや材料供給の途を斷たれ、無冠の宰相の實も、何もないやうな目に日常出會しづけて居る。此苦い經驗は、斯く申す著者自身にある。著者、曾つて現臺灣日々新報社の命に依て、總督佐久間左馬太を官邸へ訪問した事がある。其うして、其話を翌日の紙上へ掲げると、同時に、總督官邸の祕書官から著者へ電話があつた。其言葉に『貴君ですか昨日總督閣下を御訪ねになつたは』といふから『左樣其れは如何にも私です』と答へると『そうですか』といつて電話が其れきりに切れた。其うして暫時すると、社長が祕書官に、其れに就いての注意を『取次も受けんで、突然記者を總督に逢はして呉れちや困る』とか受けたそうで、此の飛沫が更に著者の身に及んだ事があつた。單に之を見た丈でも、內地から行つた記者の身に、人知れぬ辛さのある事が合點しうるだらう。

記者は直接總督に逢はれない

又此半面の意味を忖度すると、野の人を直接總督閣下へ近づけるは危險であるの意味にもとれゝば、臺灣王にも等しい總督の權威を薄うす

當局者の不都合

るであらうの意味にもとれゝば、兎に角に、野の人新聞記者と、而して臺灣總督閣下との直接會見が、當局者に取つて非常に不都合らしい。半官報的新聞紙に、半官吏生活を營む。所謂御用記者であつてすら是れだから、此以外の記者に對する當局者の憂慮は、どれ丈であるかゝ分らない。甚しいのは、官吏の發着を書くのに局長に對する敬稱である閣下の二字を入れ損ねたといつて、其筋から小言をいはれし記者もあつた。如何に、官吏本位の植民地臺灣でも、之は又餘りに繁厚過ぎると思ふ。

臺灣の理想的新聞記者

若し、萬事此筆法を以て、臺灣に理想の記者を求るなら、其處に、理窟をいはない、閣下の敬語を書くべく全力を注ぐ、骨のない、海月の如き、器械的の人物が其れ相應であらう。由來臺灣の操觚界に人物の乏しいのは、臺灣總督府が、記者其者を俟つの禮を知らない爲なのであらう。之を經營者である處の新聞社長や、支配人や、主筆の罪に歸するのは可愛そうだ。何となれば、臺灣に於ける、以上三御用紙の經營者に自己を主張し、自己の理想を紙上に實現し得る權能がないからである。云はゝ、今の臺灣に於ける三新聞紙は、臺灣總督府の爲に統一され終つたもので、其新聞紙の理想とした處で、其新聞紙の主張にした處で、其新聞紙の色彩にした處で、どれも、之も臺灣總督府の左右する處である。新聞紙に活氣のない、波瀾のない、變化のないのは、固より當然の事である。故に局外から之を見ると歩調が一つで、表面は如何にも美しい、さらば裏面はどうかといへば、わるい事は島民に見せるな、聽かせるな、よい事丈を見せう、聽かせう、例へわるい事があつても、官衙や、官吏の一身上の出來事は、力めて紙上へ出すな、人民に知らせて呉るなと云ふ方針らしい。此結果、內地であれば、當然憚るべき新聞紙を、彼れ等は、さばかりに思つてゐない。新聞記事の制裁なんかを怖れる臺灣官吏は一人もな

新聞社の理想は總督府の理想

新聞の制裁を怖れる臺灣官吏

臺灣の不具的政治

いと云つたやうなのが、今の官吏對臺灣の新聞紙の姿で、是れが、又當然の植民政策の一つである位に當局者は解釋するらしい。朝鮮總督府の新聞取締りが八釜くて、少でも總督政治を誹議する記事のある分が、釜山や、仁川で揚陸差留めに遭ふ事も聞いてるが、其れでも、之でも、朝鮮總督府では、臺灣總督府で許さない、御用紙以外の新聞も發行させれば、通信社の存在も許しとく。此點にゆくと、朝鮮總督府は臺灣總督以上の勇氣と、雅量とを有つ譯で、此丈は、是非共臺灣總督府にも眞似させたいと思ふ。何の事はない、今の臺灣總督府は、言論の眼を塞き、口を箝し耳を聾させて、そうして不具な政治を、內地に遠い島內に施して居るのである。よし不正な政治的施設はせんにしても、恁ういふ風に言論の機關を抑壓しつゝある處を見ると、其處に開けて、いはれぬ祕密でも伏在する如く受取れる。

活氣ある臺灣の始時代の新聞紙

雜誌高山國と源太郎馬車

先つ、何の點から見ても、今の臺灣の新聞界は骨がないのである。總督府の特別會計を評する事の出來ないのは勿論、驕慢なる官吏の非行をすら筆誅し得ないと云ふ有樣だ。之を過去に於ける、新聞の創始時代に見る。時の臺灣新報主筆としては、現東京市助役で、代議士で、都新聞主筆を兼ねる田川大吉郎が居た、臺灣日報主筆としては、現京都大學教授で、文學博士である內藤湖南も居た、又民報主筆としては、國分犀東も居た、今の臺灣日々の主筆としては木下新三郎も居れば、雜誌高山國主筆としては蒙古王佐々木安五郎も居ると云ふ如く、臺灣新植民地の操觚界は一時侃諤の論議に滿され、筆端火を發するかと疑ふ程の時もあつた。其うして、時の植民政策を痛罵し、非難し、攻擊し、雜誌高山國の如きには、源太郎馬車なるものを描いて、後藤新平の之に御者たる處の諷刺畫迄も掲げ、其上熱烈、慨慨の文字を以て大に島政を論議したものだ。

骨抜きになりし臺灣の新聞

御都合主義の新聞策

尙、此後と雖も、伊藤政重の主宰した全臺日報の如きは、時の總督政治に飽足らず、盛んに論難攻擊の筆を揮つたものだ。しかし、臺灣に於ける、活氣ある、火のやうに熱した民間の新聞紙は時の驕慢官吏の標本とも云ふべき森孝造の非行を暴いて、彼れを葬つたを最後とし、永く臺灣の新聞界から、其名實を取り去られた。爾來幾星霜、飜つて、今の新聞界を見ると、啻に秋風落寞の感あるばかりでない。其處に當局者の、所謂御都合主義なる新聞政策を發見しうる。此御都合主義の新聞政策は、頻年新聞界の惰氣となり、新聞界の衰微となり、只唯り、臺灣總督府のみが、萬々歲を叫ぶ今の時代をなしたのだ。此刺戟もなく、批評もなく、攻擊などは、藥にしたくもない中に、思ふ儘なる總督政治の行へるのは、寔に幸福なる次第である。之を皮肉にいふなれば、忠實なる監視者を失ひたる總督政治ともいひ得るのだ。

守屋善兵衛の人物

若し、其れ、此前後を通じたる新聞經營家を、臺灣に求れば其れは、守屋善兵衛位なものだらう吾人は守屋善兵衛なる人物を見もせなければ、會ひもした事がない。けれども守屋の經營した臺灣日々新報社のやり法を考へ、其の人となりの說などを綜合して見ると、守屋位の新聞經營者は、內地にもたんとはない。植民地の新聞經營者としての守屋は、夙くから內地の同業者間にも知られて居た其れ丈、他人の摸し得ない手腕を有して居た。渠れか、今轉じて滿州日々新聞を經營し初むるや、元臺灣日々に在つて、渠れと親善の關係ある副社長や、主筆やを初め、多くの記者、事務員、技術員、職工輩迄が、踵を連ねて、續々臺灣を去つて、大連に渡つたなどは、渠れの人物を證明して餘りがある。殊に、渠れが、後藤新平を後に控へたとはいへ、時の民政長官大島久滿次に反抗して、久しい間の經營であつた臺日を去つて飄然上京したなどは、矢張渠れの驚人

舊社員守屋を大連に慕ふ

三者三樣の相違點

たる所以でもあらうし、渠れの野心家たる所以でもあらうが、殊更に渠れと、後藤との關係を云々する如きは野暮の至りである。不快であつた、時の民政治下の新聞經營を罷めて所謂後藤の滿鐵に、縁り深い滿日の經營者になつたなぞは、恐らく渠れ一生中の波瀾であるだらう。之を今の、臺灣日々新報社々長今井周三郎に較べ、臺南新報社々長富地近思に較べる時、吾人は三人三樣の相違點を見出すが、要するに、過去の守屋には、今井も、富地も及ばない、一樣の新聞經營術があつた。新聞經營者としての富地も侮り難い、か決して守屋の敵でない。今井に至つては、全然其敵手でない。富地は、唯着實に現狀から徐ろに進めて行く主義、其うして新聞社なるものと、南部なり、中部なりの重な官民を結びつけ更に又其れを總督府に結びつけるに於て、才かあるといはれて居る、今井は多年の官吏生活から得たる經驗を、社員操縦に應用する特殊

守屋は進取富地は漸進今井は固守

な點と、廣いとはいはんが、圓滿な社交に依て、現位置を保つてゆく者だと評される丈、其れ丈、異つた點があるのである。若し、守屋に、變化に富んだ劃策がありとせば、富地には變化のない劃策がある、今井には現狀維持がある。之れを更にいへ換れば、守屋のは急進的で、富地のは漸進的で、今井の固守的である。しかし今井周三郎は、新聞記者を操縦して、新聞を拵へる人物でない。內地なれば、郡會議長位の人物だ、守屋に兎角の世評あるに反し、今井には殆んとない。要するに可も、不可もない人だが、自覺して今の新聞社長を勇退すれば、人物がもつと向上するだらう。徒に、其地位に戀々たる如きは、本人の爲に取らぬ。臺灣の新聞の骨拔きは、其罪でないとしても、決して新聞界の適材でない。

骨拔きになりし臺灣の新聞

顧ふに、臺灣の新聞界は、政論時代を去ると共に、人物相率ゐて去り、營業時代に向はんとするに於て、盛期に向はんとする時に於て、守屋善兵衛

臺灣總督と臺灣の新聞

の如き經營者を失ひ、統一し盡されたる紙上に何等の光彩も、活氣も見る事が出來なくなつた。此間に在つて、只、砂糖の如き、島內第一の產業の爲力を用ゐ、常に積極的方針に活動する、富地近思の臺南新報あるか、意を强うするに足りる。臺中の臺灣新聞は、殘念なから振はない。最も大且つ、盛んなるべき筈の臺灣日々新報に至つては、經營者を改めて、早く眠りから覺めねば駄目である。臺灣總督佐久間左馬太は、今の臺灣の新聞にさまで重きを置いてゐないのか知らん、疑はざるを得ん。

三井と臺灣一の名家

「二十六」　喰ひ物にされし林本源

林本源といへば、臺灣第一の富豪、內地なれば、さしづめ、三井、三菱と肩を並べる程の豪族、彼の日清戰爭當時に於て、其總財產が、一寸三千萬圓もあつたと傳へられた。然るに此豪族が、三家に分裂して、以來利慾を中心とせる、さま〳〵な錯綜せる事かまつはつて、我臺灣總督府の官吏上りやいろ〳〵の惡漢が中へ入つて、之を喰ひ物にしつゝあるのである。之には、代々の民政長官か懸り合つて、流言、百出、語百出、其結ぼれて、亂れて、亂れに亂れた糸のやうな暗鬪か、次第〳〵に、此豪族の資產を減じ又しまうらしい。如何に、三千萬圓の巨資產かあつても、三分しては普通の富豪に異ならない。今では其れが四分した。其れを、又、官吏の喰詰者か寄つて集つて、搔き亂す。時に於ては、刺客やうのものか放たれたり、毒殺的行爲か行はれたり、四房四樣に立て分つて、其主と其主と、其黑幕と黑幕とか、互に鎬を削つて相爭ふ樣に至つては、淺ましいつてよいか、もの凄いといつてよいか分らない。つまり一種不可解のお家騷動で、甲の說にも理かあれば、乙の論にも眞かある、丙の言にも誠實がありそうで、殆んと五里霧中に彷徨するといふのか、林本源今日の有樣である。

一種不可解のお家騷動

喰ひ物にされし林本源

林家の祖先

林家の祖先を林平侯といつた。此人が、對岸の支那から臺灣へ來て、產を作り、其うして子孫百年の長計を定めたらしい。其不動產法の如きに至つては、必ず一地々々へ管理人を置いて、其地方の小作人を支配し其れを又自分が一手に統べ括つて、寬嚴宜しきを得る如く、小作作りの島氏を愛撫する一方には、資產が面白いやうに殖えて行く。茲に於てか、全島內に、宛然たる玉樣のやうな勢力が出來、其處へ、又此人物が政治家肌であつたから、益々其威權を加へたのだ。蟠て此下へ生れたのが、長子の林國源を初めとして、林本榮、林源成の三兄弟、此又嗣子が別れて三家になり、第一房が林維讓、第二房が林維源、第三房が林維德といふ如く分れたが、何處からどれ迄が何の房の所有か、此時代でも、未だ各財產の限界が判然して居ない。するると、此三房中の人物が林維源であつた。維源は林家中興の人物である。林家の今日あるは、一に不世出の英才を

林維源は林家中興の人物

老專制族長の權威

以て、貨殖の途に通じ、利財の觀念に精しかつた維源の賜物に外ならない。而かも、維源は、死する迄國藉を支那に置き、其官位からいつても、支那の大官であつて、子孫一家を、皆我日本の國藉に入れて居た、自ら奉ずる事の薄い、勤儉質素なる近代の偉人である。此維源在世中の林家は、ことの音もせぬ如く靜肅で、此老人時代に倍加した祖先傳來の各房の資產は、實に全島民の羨望措かざる處であつた。其んな次第で、此家中興の殊勳者で、林家內外の樞務を掌とる、此老專制族長の權威は、素ばらしいものであつた。然るに此維源老人の死亡と共に、さしもに固い林家の礎が、中心的大人物を失つたので、急にうごき初めたのだ。然るに、維源に嗣とすべき小供がないので、之より先、餘儀なく他から養子を入れた。其れか今の第二房の族長林爾嘉其人である。處が、後になつて、林祖壽といふ實子が生れる、林柏壽といふ次子も生れる、林松壽と云

喰ひ物にされし林本源

維源後繼後加はる第二房の權威

ふ第三子も生れたが、林爾嘉は依然として族長の位置に据はり、養父の實子林祖壽を祖椿記の號主にし、次子と第三子とを合せた者を、松柏記主にしたのである。然るに林爾嘉の下へ、又生れたのか、長子の林景仁を初め、林曠義、林鼎禮、林崇智、林履信の五子である、中景仁を嗣子として、之を訓眉記の號主にし、又曠義を拔いては、自分同樣支那の國籍に入れた。更に、一方の第一房と、第三房を見ると、第二房林維讓の子としては、林熊徵、林熊光、林祥の三子があつても、又熊徵丈は支那の國籍に入れた。第三房林維德の子としても、林彭壽、林鶴壽、林崇壽など云ふ、他の二房に劣らない人物はあるもの、一房、三房に比べて、第二房林爾嘉の權威が、日に加るばかりである。又當時の族長としての林爾嘉の年齢が、他房の族長よりも三つ四つ上であつて、其れが螟蛉子であつたから、ゆくりなくも問題になつたのだ。

林維源後藤新平に子孫の將來を托す

長官か島民の私事に容喙の矢

又問題の起る時は、さま〳〵の問題が起るもので、之より先、時の民政長官後藤新平が、對岸支那視察の途に上ると、早くも其れを聞き込んだ林維源が『後藤は自分共の子孫が皆國籍を置く、臺灣の民政長官だから兒孫共の世話になつてる緣故もあり、自分から駕を枉げて逢ひたいが、向ふの官位よりは、自分の本國の官位の方が高いによつて、其の邊がどんなもんだらう』と心配するのを、傍の人が、さま〳〵に勸めて、遂に後藤新平に逢つた。逢つて、臺灣に居る處の自分の子孫の將來を懇々頼んだ上、後藤新平の一行に非常な饗應したそうだ。此頼みに依つて歸臺して以來の後藤新平は、陰に、陽に林家の私事に世話を燒き維源老人の依托に背くまいと欲したのだ。是れぞ臺灣の民政長官にして、一島民の私事に容喙の端を啓いた嚆矢である。全島第一と云ふ富豪の名に、後藤新平が、一寸野心を起してみたが、どうか、迄は分らんが、之を前例

益々甚しき一家の暗鬪

として、代々の長官が干渉を試みた。又見やうに依ては、世話を燒いたもいへるが、干渉を試みたといふ方が適當かも知れぬ。兎にも角にも恁う云ふ具合で、爾後の林本源一家は、臺灣民政長官の、殆んと保護下に置かれたのだ。如何に、他人の頼みがあつたとはいへ、島内の名族の故位を以て、民政長官の官職を帶んだ人か、何も一私人の家に特別保護を加へんでもいゝでないか。夫が祝辰己の民政長官時代になると、一家の暗鬪か益々甚しくなつて、臺灣總督府の官吏であつた、さま〳〵な人や、土語に通ずる民間の内地人やが、傳手を求めては、奇貨措くべしとして林家に這入り込み、一家の暗鬪を幸ひ、巧みに自己の懐肥しに腐心した。其處へ新に招かれて、一家の主事になつたのが、若森久高と云ふ人である。其れを誰れか推擧したといへば、云ふ迄もない、祝辰己である。祝と、若森とは、曾て上官と、配下の關係のあるのみでない、祝は權謀を弄

林家の總管事大島久滿次
義正の系里見

林家の製糖會社

し、術策で暗鬪を續けるやうな御家騷動中へ、若森のやうな、溫順な、懸引をしない着實家を入れるを、却て得策であるとしたらしい。先づ〳〵、斯樣にして林家の秩序が、漸く恢復されやうとする時、祝が死んで、此後任者に大島久滿次がなると、今度は若森を罷めて、里見義正なる、大島系の、元の新竹廳長を林家總管事といふ名稱で這入り込ませ、臺北は後榮園街の一廓に、長官でも住みそうな立派な住宅を林家に建てさせた。此又里見が非常な竦腕家で、大島久滿次の後楯を頼んでは、さらですら亂れに亂れし林家の甲に附き、乙に附き、一家の攪亂を助長する如き事を企てて、遂には林家三房の合資になる製糖會社設立の事を首唱した。そうして出來たのか、今の林本源製糖會社である。斯樣に迄して、里見義正は、林本源一家を、我物顔に振舞ひ、只管私慾を逞しうする事にばかり力め林家の家務に我使役する事務員通辯の如きも、殆んと自己に關

内地新聞に現れた林家の眞相

係ある者のみと限り、あらゆる專横を極めた結果、林家の保管財産中へ、四十萬圓からの負債を生せしめ、製糖會社に要したる資金の如きも、此窮境中の林家をして、強いて臺灣銀行から取出さしめたもので、之が爲林家は、大に世間の信用を失つた。而かも、此頃末一度内地の某新聞紙上に現れると共に、臺灣總督府對林本源問題は、非常に火の手を強めて天下の視聽を動かしめた。又時の大島民政長官の如きは、素面で東京の往來を歩めない程、天下の人に卑しめられた事もあつた。之が爲、里見は、自己の味方とのみ思ひ居たる第一房の族長林熊徵にすら、危險人物視されるに至り、遂に總管事の職を罷めたのだ。

つまり、此時迄の林家は、三房に分れてゐる其財産を、總管事の手一つに集めて管理して居たのであつたが、此事あつて以來、各房に其財産保管の說が起つて、各其契約書を拵へた。其れに據ると、永記益記は、第一房の家長林熊徵が管理し、訓眉記、祖椿記、松柏記は第二房の家長林爾嘉が管理し、彭鶴嵩記に、懷記業記を加へたものを第三房の家長林彭壽が管理し其うして各事務所が、將に別々に成らんとして、合同事務所の意味である處の、從來の林本源公司から、其引繼けを受けやうとしたるに、第三房の家長林彭壽に第二房の管理たる祖椿記、松柏記の管理權を奪ひ取らうとする野心が萌して來た。其處で、陰に、陽に苦肉の策を放つたり、種々の術數を弄したり、其運動の歩武を進めたが、一方は一方で、同じく直接、間接の抵抗力を有つて、此防禦に盡したので、さしもの林彭壽も如何ともし難く、味方と頼む谷某なる者に莫大なる運動費を與へ、實際の祖椿記、及、松柏記の業主である處の幼年者、林祖壽や、林松壽や、林柏壽を誘拐しやうと試みたが、柏壽のみは、どうしても之に應じない。けれども、思慮の淺い、松壽と、祖壽とは、其生母である處の者と一緒に、谷某の

第三房林彭壽の野心

幼年者誘拐の實例

甘言に乘せられ、厦門から海を渡つて、はる〴〵臺北は大稻埕なる、第三房林彭壽の邸宅へ誘拐されて來た。之が又極めて最近の事實である。斯くて、第三房の黑幕に潜んでゐる內地人の策士は、年齡十六歲に達すれば、臺灣の舊慣上丁年であるから、祖椿記松柏記の業主として、自己の財產を自分で監視しえない、事はないと、祖壽に警言させて、更に臺灣總督府要路の大官や、民官有力者の間などを訪問させ、其上莫大なる贈物をさせ、之と同時に、在臺の官民有力者を招待し、策略的の大宴會を催さんとした手初めに、祖壽、松壽の幼年者を連れた其策士が、先づ要路の顯官龜山內務局長を訪ねると、此事情を知悉する龜山內務は、先づ大喝一聲して其策士を叱り飛ばし、其不心得を詰つたので、贈物も其儘、折角企てた處の大宴會すら遂に醬餅に歸したのだ。其れをしも、尙懲りずまに、非望を遂げんとした三房の企てが怖しい。此度は、手を換へて、林本源の共同事務所內なる祖椿記と、松柏記との小作臺帳を私に取り出させ、其うして其れに依て、今後の小作米を、直接納めるやう小作人一同へ通告したるに拘はらず、納期になつても、一粒の小作米が祖壽や、松壽のゐる第三房へ送つて來ん。之が爲此策士の信用が、忽ち第三房內に地を拂ふばかりになり、年每に失敗したる第三房の非行は、一時全島內のもの笑ひになつた。

小作米取立の紛糾

突然湧いた一家の訴訟問題

處へ突然として起つたのが、林家の訴訟問題である。卽ち、幼者である故當然第三房の族長林爾嘉が監督して然るべき其幼主を、斷りもなく第三房たる林彭壽や、林鶴壽や、林崙壽やが、共謀して誘拐した上、恣に其財產を橫領しやうとしたのを、第二房の林爾嘉や、第一房の族長林熊徵が訴へる事になつた。其うして此原被告は、何れも其關係の深い內地人辯護士二三名宛を依賴し、血で血を洗ふやうな、淺ましい裁判が、臺北

胸に一物めろ検察官長

地方法院の検事局に開かれて、横領助長に與つて聞えある林遠臣なる者が先づ拘引を受けて、臺北中は非常な騒ぎである。其れを土地の新聞紙が、僅に數行より報じて居ない。斯る中に裁判は進行したものゝ胸に一物ある時の検察官長松井四郎は、林本源は全島第一の名家で、且つ全島民に範を垂るべき富豪である。其同族が今互に法廷にて爭ふと云ふのは喜ぶべき事でない。林家の爲惜むべき事であると双方の辯護士を喚び出し、告訴を取り下げ、示談すべき事を懇諭の結果、告訴取下げといふ事になつた。其處で恁ういふ場合には、必ず出るべき筈の内田民政長官を中心として、臺北廳長の井村大吉や、臺銀頭取の柳生一義や、木の新や、松井四郎やが仲裁人になつて、示談となり、茲に問題の種になりつゝあつた、祖壽や、松壽やの資産は、劃然と第二房の家長林爾嘉の手から取戻し第四房となつて獨立し、別に維記事務所と云ふが出來

問題落着と總花的報酬

て、更に又之に與つた原被告辯護士を三等に區別して、一等の報酬額が一萬圓、同二等が七千圓、同三等が五千圓といふ如くに、總て六萬何千圓かの報酬金が、半年經たない中の事件で煙になり、其の上に拵へた事務所内には、此關係よりして官を罷めた松井検察官長が、只の松井四郎になつて、維記管理人なる名義と、同族會議顧問と云ふ名義の下に、俄に四百圓の月俸を受くる身の上になり、之に隨ふ事務員亦、其れ相應の俸給を受ける事になつた。其うして、此大問題の島はついたものゝ、從來の如く兒であり、其家長である第二房の林爾嘉の手に管理されてゐれば無事だつた其れが、只難有迷惑なる當局者の干渉を受けたばかりで、二幼年嗣子の資産は、茲に不安なる管理人の手に渡り、其當初に於て、一寸十萬に近いものが、消滅する事になつたのだ。之に關したる某辯護士の如きは、此總花的報酬の其れを今期の逐鹿運動に投ずるそうである。

松井四郎の陋劣なる心事

其れにしても、代々の民政長官や、臺北の廳長や其他の民間有力者が、林家の事に限つて大に力瘤を入れる理由が分らない。殊に、自己の退隱所を拵へるべく、兩者の裁判に手加減を試み、其うして示談和解の仲裁を自ら敢てしたる、元の檢察官長松井四郎の如きに至つては、陋劣なる心事、眞に唾棄すべきであるまいか。斯樣にして、一事件起り、一問題起る度毎に、臺灣第一の名族林家の資産は、難有迷惑なる一種の保護下に、次第に衰へ行くのである。新聞紙はあつても、言論の機關はあつても、之を一種の問題として、島內の輿論に訴へる事だにも出來んのだ。嘆すべきであるまいか。

『二十七』　移民は糖業策の犧牲

臺灣植民地は古いが、未だに母國人の國籍なるものがない。五年住む者でも、十年住む者でも、十五年住むものでも、臺灣では皆母國からの寄留籍より有してゐないのだ。決して永住とはいはれない、ある一定の目的に到達する迄の假居住地とより見做す事が出來ぬ。內地人の墳墓が、何年經つても割合に殖えないのは、一に國籍の設けが、新植民地にないからで、又驚くべき個人的の大事業などの起らんのも、同じく此故であらう。

國籍のない臺灣植民地

かのウエブスターの辭書に、『殖民とは母國を去り、遠隔の地に移住し、開墾農作に從事し、茲に永住し、猶母國の法律に服する人民の一部なり』とあるは、正しく殖民の定義なるものであらう。又移民と、殖民の區別を書いたものに『移民とは多少永續の居住を目的とする人民の移轉で殖民は、母國より殖民地への移民なるを必要とす。移民なくして殖民はないが、殖民なくても移民は有り得るものである』と說いてるが、

人口過剩問題が起る臺灣移民

今日の臺灣には實際の殖民がなくて、只移民のみが多いのだ。勿論此移民は、母國の政權下を去つて、北米合衆國のやうな、主權國への移民とも異なれば、天性に於て自由を好愛する彼の希臘人が、山坡重疊せる半島谷間の都市を去つて、多島海、若くは、西部以太利、シシリー等に移住する意味とも違つて居る。いはゞ母國の人口過剩問題から、起る處の移民のみであつて、之から見ても決して純然たる殖民地とは言はれない。其純植民地でない、臺灣の移民制度に缺陷があつたり、移民策に失敗の伴つたりするのは、寧ろ當然の事で更に此完全の日を將來に求めなば、其れは今人の植るたる島内の樹木が、後世子孫から先人の遺物だと云はれる時であらう。

臺灣移民の第一期

臺灣に於ける移民招徠の第一期とも見るべきは、明治三十九年中、數十戸の内地人を臺東の未開地へ移民したのが初めで、之と相前後して臺中廳にも稍大規模の農場經營者があつた。其れから、同四十一年末に少しばかりの内地農民を未開地に移入したが、植民の實を擧げるにも、移民の實を擧げるにも、主腦となる處の臺灣總督府が、其れ程熱心でなかつた爲、移民策と云ふ事に力を注ぎ得なかつた。隨て此等少數移民の成績が餘り思はしくない。如何に、移民事業に冷淡な總督府でも、此思はしくない成績を見ては默つても居られず、其處で、翌四十二年度はほんの申譯的なる官營移民事業の豫算額三萬圓を計上し、臺灣總督府自身が、一部の移民事務を直接開く事になり、他面に在つては民營移民の奬勵策を立てた。けれども、此年から之を實行したのではない、其準備に取り掛つた丈だ。即ち其事務を殖産局の林務課に屬したり、移民適地の踏査をしたり、移民の農業經濟や、移民の收容準備に着手したり、次年度になつてから、此豫算を七萬九千五十圓に增加したり、殖産局に

第一期の移民費僅に三萬圓

第一期の兒戯的移民事業

移民課を新設したり、兎に角、植民地らしい移民の形式的運動を開始したのである。

諸君、臺灣が我領有に歸してから幾年になるだらう。明治二十八年から算へても、臺灣總督府が、始めて移民招徠を初めた三十九年迄は、一寸十年餘りになる。領有十年餘りを經てから、初めて移民したといふのが、已に鈍(どん)極まる話ではあるまい。如何にも、此間には、土匪か到る處に出沒して、始終我軍隊が動いて居た、蕃界は蕃界で、隘勇線に迄、蕃害頻々といふ狀況であつて、或は移民どころの騒ぎでなかつたも知れん。此事情丈は大に諒とする。諒とするけれども、愈々移民事務開始の當初に於て、三萬や、七萬の端した金を、豫算に計上するが、已に兒戯的である。其兒戯的は、愈々益々進んで、特に移民課なるもの丶新設が出來たに、其れが、又臺灣總督府殖産局内の一分課といふのだから驚き入る。

何故殖民局を設けぬか

臺灣か、殖民地として、大に移民せんとするなら、何故、別に殖民局位のものを設けないだらう。殖民地の實を擧げんとするには、又是れ位大規模の計劃を立て丶よいのである。若し、内地新來の人が臺灣へ來つて移民課は何處に在ると問いた時、之に滿足な答解を與へるものが臺灣に何人あるだらう。臺灣總督府の移民策に熱の籠つてゐぬのは、此一事を見た丈でも分る。今日其移民策の、失敗に終つてゐる如きは、寧ろ當然の結果であらうと思はれる。

東部臺灣の移民村

現在の處、東部移民適地としては、花蓮港廳で、七脚川社、水尾庄、璞石閣、針朔社附近、は東廳は、新開園、鹿寮社、呂家社、知本社附近、此中には官營移民もあれば、自由移民もある。而して、此一戸割當ての面積は、一甲五歩が田で、三甲が畑六甲が美國麻を作る畑になる。其處で此東部臺灣の移民地の地形をいふが、中央山脈と、海岸山脈間に介在する東部一帶の平

人の住む家すら滿足にならない荒野

野は、幅員の僅々一里に滿たぬ處から、四十餘里に亘る延長に及んで、此間々には、本島人卽ち臺灣土人と、アミス蕃人とか混住し、移民なる者か、亦此間に部落々々を形つくる事になるか、何をいふにも交通不便の土地で、臺灣第一の風土病ともいふべき、マラリヤの策源地位に從來目されて居る土地である。內地から移民が、其れへ行くにしても、基隆に着いて、其れから沿岸廻りの船に乘り換へて、其うして花蓮港なら花蓮港へ着くもいゝが、激浪常に岸を嚙んで、殊に天候險惡の日などに出會しては危險で上陸がむつかしい。之が平穩の日であつて、澤山の荷物や、大勢の老幼を連れた移民が上陸するにしても、どうかすると艀船內から海中へ跳ね飛ばされる。其うしてなり、どうなり、先つ無事に上陸が出來たにしても、移民地迄二日行程もある、人の住む家すら滿足にない荒野を、老を扶け、幼を導いて、澤山な家財を携へて、其れへ辿り着く移民の困難は名狀すべきものでない。現に四十四年かの移民中には、眼のあたり此の困難に出會して、上陸後頻死の憂き目を見た上、七十幾才かの病父を十里以上も背負ひ、妻は妻で三才の幼兒を同じく背負つて五才と八才の小兒を引連れた儘、土人の運ぶ荷物率領ながら、徒步で十里の道を晝夜兼行で步んだ話もある。怎うなつて來ると、移民奬勵法も、保護法もあつたものでない。此等の移民が、內地を如何にして立つて、臺灣へ移民するかといへば、十中の半は、僅少な不動產か動產を金に換へ、若しくは親族知人の厚意を受け、其れを一家の旅費にして、前途に光明を夢みながら殖民地へ着くのである。さて愈々着いて見ると、殆んど保護も、何もないやうな、目的地到着迄の困難だ。目的地到着迄の困難は先づ忍ぶとしても、忍び難いのは、移民地到着以後の情況だ。先づ官營移民の條件としては、處に依て、農村區劃の定る迄、移民指導所農場

目的地到着迄の困難

甘蔗の強制的栽培

の農業に約八ヶ月も從事せなくばならず、野菜の如きも、又各自に栽培供給し得る迄は、同じく移民指導所農場から供給を受けるはいゝとしても、割り當てられた半部の土地には大抵甘蔗の命令的栽培を強いられ、他の半部に於て、僅に自家用の陸稻を耕作しうるものの、甘蔗栽培法に至つては、一齊に今の官營移民も、自由移民も、耕作法の不慣れな處へ其れを貿つて資金を得る迄の困難に泣いて居る。一體甘蔗は、臺灣の土人の耕作すべきもので、其れを不慣れな內地移民に命令的強いるか如きは、移民策として、失敗せざるを得ない譯だ。而かも、其土地の大部分が、つい近く迄は蕃族が割據して、其うして大部分の開墾した土地である。野獸に等しい蕃族耕作地としてはいいか知らんが、其れへ內地の文明人を拉し來つて、不慣れなものの耕作を強ゆるに至つては、沙汰の限りなる移民策といひッべきである。其ればかりでない、處に依れ

陸勇線を境界とする危險な移民村

ば、陸勇線一つを境界にして、危險な移民部落を形つくる者もある。自家用の陸稻を耕作するにしても、到底內地で耕作する如き良種のものゝ得られないばかりか、水田や、野菜類を作るに、殆んど土地を與へられない處の移民は、先つ第一に自家用野菜の需要に困つて居る。

殊に、東部臺灣に於ける、一萬二千九百二十一甲歩餘りの原野開墾地は其第一着手として、去る三十二年中、例の賀田組に開拓が許された。其うして、其處に賀田組農場なるものが現出し、一見すると、軒と軒を並べ、棟と棟を連ねた、火災後の假屋のやうな長屋か、水牛吼ゆる臺東の荒野に連つて、其れが、旗日でもあると、之も命令的に國旗を軒頭へ掲げさせられるから、偶々行つた母國人の眼から見れば、一種の美しい新日本とも見ゆれば、內地に劣らない、賀田村殖民地とも見えるのだが、さて一度其移民部落を覗いたか最後、多くの視察者は、其慘狀に喫驚するそう

哀はれ極まる移民の惨狀

だ。移民を乞食の群部落といつてはすまぬが、兎も角、あはれ極まる生活狀態であると云ふは妨げまい。

此他、阿久澤直哉の經營に係る源成農場といへ、領臺以來總督府に胡麻を擦つて一代に巨萬の富みを蓄へた本島人辜顯榮の農場といへ、高砂製糖會社の許可地といへ、皆大同小異の情況だ。内地も、島内も、汽船、汽車五割引、土地五人一家に對して三甲歩乃至、一甲五歩を貸す、其上家も貸す獨身者には、獨身者室を貸す、代金の嵩む犂(クワイ)、割耙(ハイ)、手耙(ハイ)などの農具も貸す、初年に限つて、肥料も現品貸與をなすと云ふ表面の保護法は立派だが、渡航費及第一回收獲ある迄の食費自辨の宣告に愕かない者でも、實際に豫想した收獲もない、三口なり、五口なりの一家が生活に困ると云ふ其中から、移住後四年目の其年より、土地代金や、農具代金や、耕作代金や、家屋代金や、肥料代金を合せ、一ヶ年三十九圓三十錢餘りを納めさ

せられるには大抵眼を見張らずには居られない。其うかと思へば、此又與の手としては、此返納義務終了者には、土地家屋の所有權を與へる、宅地二百六十坪を無代で與へる、地租も年賦金皆濟の年、即ち十三年間は免除する、其他の諸稅も、移住者の一家が基礎の確立する間は當分徵收しない、土地代金の返納濟まざる間でも、小作料其他の納金のないのは勿論だとか、やれ無料診察、藥價入院料半額だとか、小供は移民農村小學校に入てやるとか、さま〳〵の特待法が、半面には設けてあるが、さて實際はどうかと見ると、一寸賀田農場のやうなのが、其一例だから意外ではないか。賀田農場といへ、源成農場といへ、辜顯榮農場といへ、皆官營農場同樣、移民の喜びそうな特待法はあるもの丶空文になりさうな實例が、澤山あると云ふ事だ。以上は、主として、東部臺灣の移民に就いてのみいふ事だが、實の少くない、西部臺灣の移民狀況をいつた處で仕

西部臺灣の移民は論外

方がない。又事實臺灣の殖民事業は、東部が主で、西部は從になつて居る。若し尙嚴格な意味でいふなら、西部臺灣の殖民は、論ずるに足りないといひたいのだ。狀況已に此の通りである、如何に讓歩しても、臺灣に於ける、今の殖民策が、成功したとは言はれない。此原因に就いてふと、不健康地へ、土地慣れない殖民を入れて、不慣れな耕作をさせて、其れを砂糖政策の犧牲にしやうとするか失敗の一因であらうと思はれる。更に又臺灣が純殖民地でない事に想到せば、其れも致方のない事だと諦めはつくとして置かねばならん。噫先人の植えた蔭涼しき大樹の下に立つて、二代、若くは、三代の殖移者が、古へを憶つて、其大きさを喜んで、笑つて、抱擁して語る時は果して、何年の後であらう。

「二十八」　全島港灣の現狀

東部臺灣には良港が一つもない

全臺灣の形狀をいふと、土產の芭蕉葉の如き狹長で、本島と、十五の屬島と、六十三の澎湖列島から成つて居る。更に地理上の關係に就いて言へば、西は臺灣海峽を隔てゝ、近く支那の福州に對し、黃海の南方を扼して居る。南方には比律賓群島の呼應する、東北には沖繩群島の斷續する、若し、其れ、天氣晴朗の日に於て、東北の方、遙にふりさけ見れば、靑螺點々たる與那國島と相望む事が出來る。其處で、此芭蕉の葉のやうな、臺灣全島の港灣はどうあるかと云ふと、東部海岸は、大抵斷崖絕壁、又百尋の錘を垂れても、尙底邊に達しない處があると思へば、珊瑚礁の點在があるので、船舶の碇泊、航行上の危險を免れない。先づ東部臺灣には、只一つの良港すらないと云つてもよい。又連山脈から發源する溪流に就いて見ても、流れが急激で、長流、巨流に乏しく、其中で、稍舟揖の便ある處といへば、淡水河か、下淡水溪か、曾文溪位のものだが、此港灣がどうか

と見るに、淺瀬と、狹窄のみで、一つも安全なる碇泊地がないのである。元來が、臺灣土人に港灣修築の意思はない。其處で、天然の良港か、年代を經るに從つて、流砂游泥に埋められ、此等の地質的變遷か、遂に港灣の形狀を一變し、殆んど往昔の痕跡すら留めないものがある。例へば、八里坌港が壅塞されて、今の淡水港が開け、其又淡水港が、年々擁塞の患害を增大し、今日已に八里坌港と同じやうな悲運に遭遇しかゝつて居るが如き、乃至は、安平港の中央へ、二十年迄は依然として介在しつゝあつた一孤島が、臺南城との間に於ける地勢の隆起と共に次第に造陸され、全く本土に接續して、臺南府內港の稱が、事實上消滅に歸したが如き、又は、舊港の舊港溪、後溪の後壠溪、下淡水溪の東港に於けるが如き變遷は、潮流の作用に於ける、地質的變遷の、就中著しいものであらう。絕海の孤島で、港灣に依るより、他から交通の出來ない、文明の輸入し得られない地勢で、此衰微せる港灣の現狀はどうであらう。くだらぬ人の送別會や、歡迎會に、馬鹿々しい、金を投じたり、惡政者の紀念銅像を建てる金があるなら、舊つて港灣修築をなすがいゝではないか、產業からいつても、軍事からいつても、港灣修築が本島の生命である事は、砂糖以上に重大である、事を當局者は知らないが。六千噸以上の船が、ヒタリ岸壁へ横着けになる基隆や、現に築港しつゝある打狗の其れ位で滿足するやうでは、對岸貿易の將來が悲觀される。基隆は、一體が人の港であつて、貨物の港でない。內地から來る者の多くが、必ず上陸する處の要津であるには違ひないが、每年冬九、十月から、翌春三月迄の降雨は、南部の砂糖や、中部の米などを輸移出するにしても、多大の困難が隨伴する。茲に於て、相當の倉庫も必要なれば、相當の對雨設備が要る。其れ故、一寸の輸出にしても、荷主側に取つては、要らざる手數か加つて來るから、自

基隆は人本位の港灣

打狗は貨物本位の港灣

然と雨の降らない、要らざる手數の省ける打狗へ廻すと云ふ事になる。之れは何人にも見易い道理であつて、當局者も、亦之は已に〳〵氣づいて居るらしい。然るに、此人間本位の基隆に、明治三十三年から起つて、同三十八年迄の第一期事業に於て、約三百萬圓の金を費した。其れで尙出來上らず、第二期事業の豫算として、更に六百二十萬圓を計上し、其れが同三十九年から、同四十五年、卽ち今年迄の七ヶ年繼續事業になつて居る。つまりいへば、實質の割合にない、臺灣の玄關飾りを爲す爲に、最初から算へると、凡そ一千萬圓に近い大金が費されたのである。初めた、來て內地の人の驚くものを聽くと、六千噸からの巨船が、岩壁橫着けの壯觀ばかりである。して見ると、基隆築港の値打は、單に之丈よりの他にない意味にも受取る。此北部の代表的港灣に對する、南部の港灣を代表する打狗はどうかと見るに、之は、又貨物の港丈に、大に其の未來に囑目され、現に、去る四十一年度から初めて、來る四十六年度に至つて完成する、六ヶ年繼續事業としての築港、が企てられて居る。此豫算總額四百七十三萬三千圓、基隆の其れに比して、半額よりも尙少額の築港費丈に、規模も、基隆よりか、稍小さい。出入の船舶としても、完全に出來た曉三千噸以上の船の出入はむつかしい。此點に於て、基隆は打狗に優つてゐるが、打狗には、基隆のやうに雨季が長くない。殊に中部の米を此處から吐き出すにも、南部の砂糖を之から積み出すにも、手數が非常に省けてゆく。之が從來であると、少し大なる船は、大抵打狗港外の沖へ碇泊し、所謂沖荷役なるものをやつて居たが、夏季の五月から、九月迄、西南風の季節には、激浪狂風が其を妨げ、折角荷を積んで來た內地からの船や、對岸支那からの船が、何れへかに、其風浪を避けたものであるに、次第に其心配が今では、要らずになつた。單に、此點からばかり見

ても、四百七十餘萬圓の工事費は、寧ろ廉なるものであらう。基隆と、打狗を較べいふ者の斷案も、大抵茲に及んで居る。打狗築港が、斯樣に基隆を凌く迄に改築されたるに反して、今の打狗市街の設備は何たる事だらう。

完全なる打狗市街の設備

兎にも角にも、此丈の良港灣になる以上は、市街の膨脹は知れきつた事、其處で、埋立地が盛んかに出來た。淺野の埋立地といふものあれば、整地會社などといふものも出來た。其うして、此埋立地を、將來の打狗街に貸しつけやうとしつゝあるが、臺灣總督府は、何故之を官營にしなかつたらう。現在の埋立地貸つけに就いて、種々な評判ある事を知らんのであらうか。又打狗なる市街の土地が狹くて、鹽埕埔や、新濱街や旗後に分つて居ても、何れも土人の舢板力を藉りねば交通の出來ん事になつて居て、殊に旗後の土地家屋貸の高價にして、一人一戸の家を有するには、非常な負擔が要るといふから見ても、打狗には、普通人の住居し得られない傾向がある。其れに埋立地が出來たとなれば、其處へ我勝ちに移轉するが、さて其移轉した土地はといへば、舊居の土地貸と、さまでの相違がなくて、依然中流以下の勞働者輩は、打狗市街に留まれない結果になる。打狗市街に、若し勞働者がなかつたならばどうだらう。貨物呑吐港としての打狗の貨物は、何人が取扱ふであらう。何にしても、將來の打狗の尊重すべきものは、船と、貨物を中心とせる勞働者であらう。今の埋立地では、此等の勞働者を容れない仕掛けをやつて居る。之が官營の埋立地で、一定の案に依て、土地の平均貸附けでもする時には、於ては、此急を救ふ事が出來るのだ。之は、決して座上の空論でない。勞働者を、市街以外に排して、打狗の發展は望まれないと思ふ一寸行つて、當つて見ても、打狗旗後の地代や、鹽埕埔あたりの地代、貸家貸は、東京

勞働者の住めない打狗

基隆は横濱で打狗は神戸

の銀座にも匹敵する。臺灣總督が打狗築港に力を注ぐのもいいが、此半面の設備、卽ち埋立地の平均分配法を忘れては駄目である。若し、今の儘にして過ぎんか、港灣の進歩に逆比例する、奇形なる打狗の新市街が出來る事だらう。

更に一轉して、北南部の港灣を較べると、臺北の東京に對する基隆の横濱に對する、淡水の、浦賀、横須賀、臺南の京都、大阪なるに對し、打狗は神戸、安平は境位の處になる。隨て、安平、淡水の貿易に、過去の俤のないのは致方がない。北部に淡水のあるは、南部に安平のあると同一で、共に共に對岸貿易が主になつて居る。對岸貿易は、今の臺灣住民に、廣東、福州、漳泉州地方人種族の存在する以上、決して停止する事は出來ぬ。

出來ぬばかりでない、大に奬勵すべき性質のものであらう。然るに、安平、及淡水の現在兩港が、自然の破壞に委せられつゝあるのは、何と云ふ事だらう。基隆の築港可なりである、打狗の築港贊成であるが、安平と淡水の兩貿易港を閑却する、臺灣總督府の心事が分らない。苗圃を美しくしたり內地の觀光團を優遇する如き、不急の事を措き、淡水、及、安平の築港が望ましい。若し、尙、慾をいへば、新竹の舊港も補修して貰ひたい、苗栗の後壟も補修して貰ひたい臺中の塗葛堀も補修して貰ひたい、彰化の鹿港も補修して貰ひたい、鹽水港の東石港も、阿緱の東港も、澎湖島の媽港も補修して貰ひたい。

閑却される安平と淡水

港灣は臺灣の生命

絕海の孤島臺灣は、港灣が生命である、港灣を措いて、何の生命があらう。平和時代の時は兎に角碇泊地の艦隊一度動く時、現時の港灣は、艦隊に何を寄與するであらう。

「二十九」　女學校と中學校の半面

女學校といつた處で、中學校といつた處で、臺灣總督府は、全島に只一つ宛より設けて居ない。之が皆、總督閣下のお膝許たる臺北に在る。南部の極端に居る中、女學修業の希望者は、三十里も、四十里も、五十里もの遠きを厭はず臺北へ來る。其して其の寄宿舍の人になる。臺北に知人なり、親族なりのある者は兎に角、然らざる者は、全く見ず知らずの人の中へ來て、其うして中等程度の學校へ入るのである。北から、南へ直通の列車があるにしても、西から東へ行き、東から西へ廻る船便があるにしても、其の修學の不便なる程度に於て、到底內地の學生の夢想だにも知らざる辛苦が多い。隨て、目的地の臺北へ來さへすれば、自づと其學校より以外に、頼む處がないので、就中、感情に脆い女學生などの親和力は、內地の女學校で見られない美風になる。然しながら、飜つて、其父兄を見ると、中學なり、女學校なりへ入れる爲、わざ〳〵臺北迄遣す處の父兄は、どれも〳〵も相當の生活者でなければ出來んのだ。少くとも、百圓以上の收入ある者でなくば、子弟を中學や、女學校には入れられぬ。

中流以下は中、女學校を覗かれない

（臺北在住者は別として）其處で、百圓以下の收入者では、旅から中學へ入れる事も事も出來ず、女學校へ入れる事も出來ず、燃ゆるやうな其志望者を徒らに廢學せしめると云ふのが、今の情況である。語を換へていへば、非富人に薄く、富人に厚い今の中學制度である、女學校制度である。隨て、中學校も女學校も、殆んど中、上流者の爲に設けられたかの觀がある。加之、他に專門的最高學府のない處から、自づと中學と、女學校とが、臺灣に於ける最高學府の如き傾向を生じ、延いて其校生に迄、最高學府の學生然たる態度が見えて居る。一つには、同性質の學校が他に設けてない故もあつて、刺戟も、競爭もない結果にも因るだらう。恁ういふ制度の、よいか、わるいかの事になると、敎育非專門の吾人には全く判ら

中學の模範學寮

なくなつて來る。依つて、吾人の實見した事實に就いてのみ批評を下すが、中學の模範學寮なるものは、全く贅澤極まる處の設備である。一部の人は之を東京の曉星中學だといつて居る。之を初めて設けさして、其うして、年々歲々、現に尙奬勵金を與へて居るのが後藤新平だ。學寮の規定は、普通三十名の生徒を以て限るとし、此中には特待生も含んで居る。つまり學寮の主眼とする處は情育であるらしい。此指導者としては、セフトン、フォールと云ふ、二人の美しい英國婦人が瀟洒な校室に控へて居て、粗野に流れ、蠻風になつむ處の生徒を、溫かい起居動作の中に包んで、朝な夕の一進一退から、仔細にいへば、ナイフヤ、ホークの持ち法迄も、手をとらんばかりにして敎へては、英國的ゼントルマンの稽古を積ませつゝあるのである。だから、此學寮の應接室へ行つて見ると、美しく繪畫などで飾り立てた室の中央に、一輪瓶などをしやん

英國的ゼントルマンになる美成

と置いて、座一つ見せないといつた如き體裁で、何の事はない、神經質の夫人の應接室を見るやうで、中學生などの居る寄宿寮とは少しも思はれない光景だ。講堂を覗いて見ても、自習室を覗いて見ても、食堂を覗いても其れだ。寢室は寢室で、奇麗な毛布と、さつぱりした木製の寢臺とがあつて、一つ〳〵に、上から蚊帳の下りるやうになつて居て、窓からの光線もよくとほれば、空氣の流通も極めてよい。其れが食時になると、五人若くは六七人を一組とせる卓と卓を圍んで、パンをちぎつては口に入れ、口に入れては、ホークと、ナイフを動しながら、百囀りの英語會話に、さま〳〵な言葉の花が咲く。つまりいふと、贅澤な外人の息子が、家庭敎師の自宅へでも、預けられてるが如き有樣で、人食鬼の住むてふ、臺灣などにあるべき中學校のさまとは、全く受取れないのである。恁うなつては、ハイカラ敎育も極點に達したので、何と評してよいか分らな

大金を掛けて男生を女らしくする

い。外國人とはいへ條、獨身の未だ老境に入らぬ婦人を、さらですら血の沸き立つ男生の舍監にして、其指導下に男生を動かそうとするのは問題であるまいか。摸範學寮なるものに、にやけた生徒の多かつたり、活氣のない青年の多いのは、決して偶然でない。いひ換へると、莫大な金を掛けて、敎へずともよい賢澤なハイカラ生活を、特殊の中學敎育とか摸範學寮とかの名の下に敎へるので、どういふ點が摸範なのか、突ッ込んで問ふて見度なる。何れから見ても、摸範學寮の現制度は驕りの沙汰、學生生活には不相應極まる事實である。不急の事業に、非不急の大金を掛けて、活氣のある、男らしい學生を、殊更に女らしく、不活潑にするのだから喫驚らする。

然らば、此經費は幾何かといへば、普通の寄宿生の約十一圓なるに、之は約十三圓になる。其處で、普通中學生の寄宿寮と、此學寮を較べて見ると、どうして〳〵、却々二圓位の相違とは見られない。恐らく後藤新平の奬勵金と云ふのが、此方面へ注ぎ込まれたり、此他さま〴〵の方法で、其不足費の補はれ行く事と考へられる。內地の中學校の寄宿舍より他に知らない、今の文部大臣に、此摸範學寮なるものを見せたいと思ふ。其うかと思ふと、女學校の方になると、之は又思ひきつて切りつめた經濟らしく、應接所を見ても、寄宿寮を見ても、寢室を見ても、ハイカラ風が微塵もないばかりでない。裝飾も施してなければ、何等著しい設備がなくて、唯極めて質素な風ばかりが人目を惹く。中學校になくもがなと思ふ其れが、女學校にはあらせたいと思ふに、女學校では其れをする風がない。何れかといへば、臺灣總督府の女學校は、西洋風の空氣よりも、純日本風の空氣が多くて、同じ臺灣總督府直轄の學校でありながら、學校の空氣も正反對なら、生徒と生徒の空氣も正反對、其して、其處に、臺

文相に見せたい學寮

女學校と中學校の空氣

灣總督府の不統一なる敎育方針の一端が窺ひ得る。

『三十』 特別會計の內容

數字的實證の列擧

臺灣總督府に於ける、特別會計廢止の聲は年一年に高い。領有してから十八年間にもなり、獨、獨立會計を天下に標するから見ても、又當然起るべき處の問題だ。しかし、何故に、此問題が起るかを知る事は、極めて切要な事である。其れにしては、是非共特別會計の內容を知ると共に一般會計の歷史をも知らねばならん事になる。其處で、面倒と、沒趣味とを忍んで、より多くの數字的實證を逐一擧げて見やう。

臺灣が我領有に歸したのは、明治二十八年である。二十八年は未だ島內に敵の旗影の消え去らぬ時で、文官と雖も、尙武裝して枕に就いた時代である。隨て卓上に向ひ、悠々數字的の豫算を組み立てたり、具體的

眉をひそめたる新植民地の將來

の成案を拵へたりする事が難かつた。其んな次第で、どうしても、複雜なる豫算を立てる事が出來なんだ。然るに、此翌二十九年度の豫算は九百六十五萬圓である。然るに、當時の臺灣の收入は、僅に二百七十一萬圓ばかりよりないのであつて、殘額六百九十四萬圓なるものは、實に母國政府の補助金であつたのだ。此次年はどうかと云ふに、此歲入豫算は一千百二十八萬圓で、尙母國の補助金九百六十六萬圓を仰ぐと云ふ次第で、世間の耳目は、此新植民の將來に就いて、大に眉を顰めざるを得なかつたのである。然るに、意外にも、此以來、臺灣の歲入が、少しづゝ增加の傾向を示し、國庫の補助金も次第〳〵に減額したが、尙明治四十二年度迄は、補助を繼續せざる可らざる概算であつた。處が、又意外にも、臺灣總督府の會計は、此國庫補助を辭退する迄に收入が增加し、同年度の豫算額に於ける、一百四十九萬十五圓の補助金中、僅に七十萬圓を

自給植民地になつた

受け入れたのみで、他は悉く辭退したのである。斯樣にして、三十八年度からは、全く從來の補助金を辭して、所謂臺灣の獨立會計なるものを標榜し、自給植民地になつたのだ。之を人間にすれば、漸く一人前の資格か出來たのだ。今試に、明治二十九年度から、同三十七年度に至る迄母國政府の補助金を受けた期間の、臺灣總督府豫算の內容を示して見ると。

二十九年度臺灣收入二百七十一萬圓
同　國庫補助六百九十四萬餘圓
三十年度臺灣收入五百三十二萬圓
同　國庫補助五百九十五萬圓
三十一年度臺灣收入八百二十五萬圓
同　國庫補助三百九十八萬餘圓
三十二年度臺灣收入千百七十五萬餘圓
同　國庫補助三百萬圓
同　募集公債三百二十萬圓
三十三年度臺灣收入千四百九十萬圓
同　募集公債五百五十萬圓
同　國庫補助二百五十九萬餘圓
三十四年度臺灣收入千三百八十萬圓
同　國庫補助二百三十八萬餘圓
同　募集公債四百八十六萬圓
三十五年度臺灣收入千九百四十九圓
同　國庫補助二百四十五萬餘圓
同　募集公債四百七十四萬圓

三十六年度臺灣收入二千餘萬圓
同　國庫補助二百四十餘萬圓
同　募集公債四百餘萬圓
三十七年度臺灣收入二千二百餘萬圓
同　國庫補助七十萬圓
同　募集公債三百五十萬圓

殆んと八倍强の增收入

以上に依て見ると、臺灣の收入は二十九年を以て、三十五年度に一寸比較しても、殆んと八倍强の增收入である。二十九年度に、六百九十四萬圓の國庫補助を受けた其れが、漸次減少して、三十七年度には七十萬圓の少額になつたのを見ても、如何に臺灣の會計が豐になつたかゝ知れる。茲に於てか、初め臺灣の將來に對して眉を顰めた者か大に樂觀する事になり、又一般に臺灣なる將來有望なる新植民地に注意を拂ひ出したつまり、臺灣の領有以來我母國政府は、臺灣植民地の爲に、軍事費を除いて、凡そ三千萬圓の補助をした事になる。卽ち三千萬圓の補助金が臺灣か、一人前の植民地になる迄の後見をしたのである。之を佛國の印度支邦を經營するに付、前後八ヶ年間に、國庫から七億五千萬フランの印度支邦を經營するに付、前後八ヶ年間に、國庫から七億五千萬フラン卽ち我三億萬圓を補助し、其上、八千萬フランの公債を募集したに比すれば、雲泥萬里の相違どころでない。加之當時の世界各國が、我日本の臺灣經營に於ける成功を、盛んに謳歌したるか如きも、決して偶然の事でない。

以上の如く臺灣總督府は、三十八年度から、自給植民地を以て天下に標榜した。時の總督、及民政長官は誰れかといへば、兒玉源太郎及後藤新平であつた。兒玉の鼻も高ければ、後藤の鼻も高い。此點丈は、此二人者に、大に謝さねばならん事だ。爾來、臺灣總督府は進歩と發達を重ね

年々歳入を增加す

て、年々其歳入を增大し、三十八年度には二千五百四十餘萬圓の歳入、三十九年度には、三千六餘萬圓の歳入、四十年度には、三千五百二十餘萬圓の歳入、四十一年度には、三千七百餘萬圓の歳入、四十二年度には、四千四十餘萬圓の歳入、四十三年度には、五千五百三十餘萬圓の歳入、四十四年度には、四千三百六十餘萬圓の歳入、四十五年度には、四千五百三十餘萬圓の歳入になり、之を、領臺初期の歳入額に、較ぶれば、非常な相違であるばかりでない、立憲政體以前に於ける、我帝國政府の歳入總豫算と殆んと匹敵する程の有樣を呈したのだ。處が、此處に、四十五年の豫算に付、是非共一言せざるを得ない事である。

四十五年度の豫算に付一言

四十五年度の豫算額は、四千五百三十二萬五千五百八圓だ、から之を前年度の歳入豫算額四千三百六十五萬千六百五十一圓に比すれば、百六十七萬三千八百五十八圓の增加になる。然らば、此增加額は何であるかといへば、先つ第一は、專賣收入に於て、主として樟腦の輸出、上等阿片烟膏の賣り下げ、及、煙草、食鹽などの賣り下げ、數量增加の見込額三百二十四萬七千四圓である。次は、前年度の繰越金八十三萬一千餘圓である。此次は、鐵道收入に於て、各營業區に旅客賃銀と、貨物搬送料の增加する見込あると、臺灣內地聯絡切符の發賣開始に依る增加見込七十一萬五千圓である。此他、酒造稅に於ける造石高增加の見込額三十一萬五千餘圓、此他の雜增加見込額四十八萬九千餘圓等を合計すると、四百五十九萬八千餘圓になる。又之に對して、減收見込のものをいふと四十四年度の風水害の影響せる、砂糖生產額減少に於ける同消費稅の爲二百六十一萬二千餘圓の減少を見るを初めとして、此他尙減少見込のもの三十一萬千餘圓に達するから、此合計が二百九十二萬四千餘圓になり、更に、以上の增減を加除すれば、百六十七萬三千餘圓の增加

減收見込額

を見る譯でなる。

又四十五年度の歳出豫定額を見ると四千五百三十二萬五千五百八圓になる。之を前年度の豫定額四千三百六十五萬千六百五十一圓に比すれば百六十七萬三千八百五十七圓の增加だがどうして此增加を見たか又此增加した重なものは何であるかといへば、先つ專賣局の歳に於てすら、樟腦、及食鹽の收納增加に伴ふ補償金の增加がある。又阿片、及煙草の購入、製造數量增加の爲要する費額の百三十五萬四千餘圓がある。鐵道作業局の款に於ては、營業區域の擴張、各線に於ける列車運轉回數の增加に伴ふ經費の增加、並に、車輛と、建物の補充を要する事の多い爲一百三萬四千餘圓の增加。新營費の項に於ては、廳舍の新營を要するもの多き爲、五十九萬七千餘圓と、縱貫鐵道延長費の項に於て、既定年額增加の爲、五十五萬圓と、內地稅徵收稅の款に於て、從來地方稅の支辨であつた經費の國庫支辨になつた爲の四十七萬一千餘圓と、臺北醫院新營費の項に於て、本費を繼續費となし、新に豫算したるが爲の、本年度の年割額四十萬圓と、總督府廳舍新營費の項に於て、年割額增加の爲の三十萬圓と、臺南水道費の項に於て、本經營費にして、新に豫算したるが爲の、本年度の年割額三十萬と、此他の各款項に於て增加するもの小計二百七十三萬八千餘圓を更に合計すると七百六十四萬八千九十七圓圓の支出增加額になる。處が、又茲に減少するものがある。其れは何であるかといへば、第一か、勸業補助の項に於て、原料糖の製造補助を廢した爲、二百六十四萬八千餘圓か減少し、第二には、一般會計繰入金の項に於て借入金の償還並に、公債借入金の利子仕拂を要するものゝ少きと、砂糖消費稅の繰入れを要さない爲、二百二十一萬六千餘圓を減少し、第三には、阿里山森林經營費の項に於て、年割額減少の爲四千

歳入額

四百圓を減少し、第四には、他の各款項に於て、減少するものゝ計六十六萬九千九十餘圓を合計するを以て五百九十七萬四千二百四十圓を減少するから差引增減の結局が、百六十七萬三千八百五十七圓の歳出增加になつて茲に歳入豫算との權衡が保つてる譯になつたのだ。其處で、又一轉して、現時の臺灣總督府がどんな財源に依て、其巨額の財政を如何に料理しつゝあるかを見るも一興である。先つ一寸經常部の種目を見ても、三十一科目ばかりになる。中重なるものを擧げると、歳入の部で

地租	三百七萬餘圓（四十五年度豫算以下同じ）
砂糖消費稅	八百十三萬三千餘圓
酒稅	百二十五萬三千餘圓
郵便電信收入	百三十餘萬圓

食鹽收入	九十七萬餘圓
樟腦收入	五萬三千五百三十六萬四千餘圓
阿片收入	五百二十三萬餘圓
煙草收入	四百八萬餘圓
鐵道收入	四百八十餘萬圓

臨時部歳入

公債募集金受入	二百五十八萬五千餘圓
前年度繰入金	四百十九萬五千餘圓

以上に對する、歳出の重なるものは、どうかといふに、先つ經常部に於て

總督府廳費	百三十三萬餘圓
通信費	百五十四萬餘圓
鐵道作業費	三百六十一萬餘圓

專賣局費	九百八十一萬八千餘圓
一般會計繰入金	三百四十七萬九千餘圓
地方費補足	百五十九萬餘圓
水利事業費	百二十萬圓
打狗築港費	九十七萬八千圓
臺東鐵道建設費	六十五萬七千圓
臺北醫院新營費	百五十一萬餘圓
阿里山經營費	百五十六萬餘圓
勸業費	百六十一萬餘圓
理蕃費	三百三十萬圓
補助費	百三萬餘圓

を計上し、尙以上の外、關稅統一なる口實の下に、臺灣關稅にして、一般會計に繰入れたるものは、四十二年度に於て、八十三萬餘圓、四十三年度に於て、百二十六萬餘圓、四十四年度に於て、百十萬餘圓、四十五年度の豫算に於ては、百五萬餘圓であるが、此他關稅取扱費と云ふ名義で、更に臺灣特別會計に受入れたるものを算ふると、先つ四十二年度に於て、九十餘萬圓、四十三年度に於て、百二十餘萬圓、四十四年度に於て、百十餘萬圓、四十五年度豫算に於て、百五萬餘圓程ある。又前記歲入の外、地方稅の收入が、七百萬圓、乃至、五百萬圓（特別會計補足金を合して）ばかりあつて、歲出額が、亦之に伴つてゆくと云ふ事である。

關稅取扱費なる名義

臺灣の事業公債

今度は、臺灣の事業公債に就いて一言するに當り、其發行高を調べて見る。

特別會計の內容

三十三年度	二百二十一萬一千四百餘圓
三十四年度	三百二十二萬二千六百圓

三十五年度　千百二十七萬三千九百圓
三十六年度　七百萬圓
三十七年度　七百三十七萬五千百八十五圓
三十八年度　三百三萬九千八百圓
三十九年度　三十八萬五千六百五十圓
合計　三千四百五十萬八千五百三十五圓

事業公債法に據る借入金

を募集した譯になるが、此中から、三十八年度以來、四十五年度までに償還すべきものは、五百四十八萬七千五十圓であるから、尙此殘額が三千百五十五萬一千百六十九圓ある譯になる。次に臺灣事業公債法に依る借入金を見ると

三十三年度　三百二十萬圓
三十四年度　二十萬圓
三十五年度　二百六十四萬九十二百圓
三十六年度　五十萬圓
三十八年度　六十四萬九千六百圓
四十一年度　八十二萬三千七百六十四圓
四十二年度　二百五十八萬二百四十圓
四十三年度　二百八十三萬八千八百七十圓
四十四年度　百十七萬七千九百九十五圓
四十五年度豫定　二百五十八萬五千圓
合計　二千二百七十萬六千六百六十九圓

此借入金に對する返濟高は、千八百三十萬二千八百四圓で、つまり四百四十萬一千八百六十五圓の殘額を生ずる譯になる。兎にも角にも、以上は、所謂臺灣特別會計なるものゝ、極めて概略なる平面描寫であつて、

特別會計の平面描寫

母國の豫算に拮抗する臺灣の發展

其を悉く列擧する事は、到底小冊子の能くする處でない。之に由て之を觀るに、臺灣の人口は三百餘萬である、地の面積としても、僅に貳千三百三十二方里よりない眇たる一孤島である。其れが、領有されてから、恰度今日迄十八年になる。此間明治二十九年以來同三十七年迄、前後八ヶ年の間、母國政府の補助金を受くる事、大凡三千萬餘圓の巨額に達して居る。然しながら、三十八年以來、所謂自給植民地の實を擧げてからの進歩發達は非常なもので、立憲政體以前の帝國政府の總豫算に拮抗する有樣になつたのだ。若し、尙ほ、今後に於て水利事業を完成し、運輸交通機關を完成し、理蕃事業等の成功するに至らば、臺灣の膨脹發展は、停止する處を知らざる迄になるだらう。特別會計も、もう廢止してよい時分なのだ。然るに、只、茲に憂ふべきは、所謂特別會計なるものゝ眞相である。此眞相か知れゝば、臺灣總督府の瀰縫的會計の眞相が、天下に公表されるのであつて特別會計を廢して、一般會計に繰り入れよ

開けて云はれない秘密

なる世の輿論にすら、擧措を失した、臺灣總督府の內部に、どれ程開けて言はれない秘密のあるかは、知る人より知る者がない。之を辯護する側の者は言ふ。若し、臺灣の特別會計を一般會計に合一し、斯くて臺灣の財源を內地財源の收入とする時、其處に西班牙の植民地の如き苟苟牙植民地の如き同一運命に陷るであるまいか。植民地の財源枯渴は、植民地の疲弊を招ぐ原因である。故に、今日は、尙特別會計廢止の、時でない。と、要するに、是れ、極めて淺薄なる辯護說であつて、何等理由とする處の價値あるを認めない。吾人をして、若し、假に臺灣總督府特別會計の弱點を突かしむれば、先つ專賣局の收出、財務局の收出、殖產局の收出、全島監獄の收出に就いて、嚴重なる查閱を試みるであらう。蓋し、專賣局や、殖產局や、財務局や、監獄や、皆瀰縫體會計法に據り

つゝありと傳へられ居るからである。臺灣特別會計の廢止は何れにしても、臺灣總督府に於ける重なる財源査閲法に據らねば、茫漠たる廢止論の如きは、何等の効果もない事になる。此又財源査閲に至つては會計檢査院長の職權で吾人のなし能はざる處である。故に、吾人は、只其を忖度するのみで筆を絶つ。

解剖せる臺灣 完

附錄

高山國放言

▼倭身短軀の兒玉源太郎を見し眼を、佐久間左馬太に轉ずる時、其處に長身豐肥の偉大漢が、貧亡ゆるぎもせずに、屹立するを發見せん。屹立は立姿の佐久間を形容するに、又なき恰當文字也。

▼人並外れて小身の兒玉と、人並外れて大兵な佐久間とは、相前後せる臺灣總督の新舊奇觀なり。さりながら、兒玉の人物と、佐久間の人物とは、拾ひし者と、失ひし者程の相違あり。若し、佐久間に、兒玉程の活腕あらしめ、兒玉に佐久間程の體格あらしめなば、相前後せる新舊臺灣總督は、形而上と、形而下に於て完全無缺なり。

▼兒玉を剃刀とせば、佐久間は鉈位也。力を故意に入れずに切れる人と、力を故意に入れて切れる人との相違よりも、兩者人物の相違は、尙非常に間隔と、距離を存すべし。

▼佐久間は他く迄も武人氣質なり、此武人氣質の人に、政治家肌なる兒玉を學べは無理な注文なり。然れども、今の臺灣新植民地が、政治家肌なる兒玉が、肝照らす後藤を配下に得て剃刀を、大鉈的に揮ひたればこそ、今の太平無事を見たるなれ。此點に於て佐久間は、兒玉、及後藤新平に感謝すべきなり。

▼忌憚なく言はしむれば、佐久間の適任は留守師團長位が關の山なるべし。之とても、頭の新しい者か、機才縱橫の參謀長か、副官かゞ居らざれば勤まらず。要するに、佐久間の臺灣總督はお情け的の氣味あり。

▼短身倭軀を氣にしたる兒玉が、島民に威を示すべく、常に變り色の服裝の與丁十數名を前後にせし仰々しさに引換へ、佐久間の巡視行列は無造作なるに拘はらず、島民、殊に番人は、未だ曾てあらざる威風堂々の總督なりと畏縮せり。佐久間が地下の兒玉に誇り得るものは、恐らく、只是れのみならん。

▼政策を弄する兒玉は、時に斯樣に堂々として、取つときの仰山な行列をして見せても、一度只の兒玉源太郎に返つては、一介の老書生たり。

▼深夜窃に、總督官邸を脫出したる兒玉が、浴衣がけの儘、陋巷の露店に客たる如きは一再ならざりし也。官もなく、職もなく、只植民地の一浪人として、當局者の注意人物たりし舊友にすら、個人としては特別の敬意を渠は拂ひたり。此會合の爲には、單騎從者をも連れず、鞭を古亭村庄なる例の別莊に揚げるが常なりき。此浪人、今尙佐久間左馬太の舊知なるも、佐久間に兒玉の雅量なきは惜むべし。

▼兒玉は才人にして、粹人を兼ねたりき。某年某月某日、巡視して中部の小都會に行く。而して官民の開ける土地の盛宴に臨席す。座に數十の侍女あり、皆悉く、官民夫人の裝ひなり、酒巡つて三行、耳熱し、面紅を漲らすも、皆對夫人の禮を愼んで、一語の戲言を發するなし。

▼時に女あり、故らに艶容を包んで、總督兒玉の面前に膝行す。而して瓶子を執つて酒を渠れの盃に盛る。此時渠れ突如として笑ひ且つ喝破して曰ふ『能く化けやがつたな』屬僚皆兒玉を凝視し、眼を睜る。蓋し官民有志の夫人を侮辱したりと解したればなり。

▼宴終つて、其地を去り、一行皆列車中の人となり終るや、屬僚の一人、兒玉に問ふて曰く『閣下曩に、能く化けやがつたなと仰しやいましたが、我々下僚の者は、冷汗を流しました』といひも果てず『馬鹿な彼等の手を見たかい。指の爪に三味線の糸痕もありや、撥胼胝もあつたぞ』と大笑す。果然、主人側の趣向として、故らに藝者を夫人風に裝はせて出したるなりき。

▼兒玉は、實に此くの如く下情に通曉す。上に宜しく、下に宜しく、臺灣統治の實が擧つたのは、無理ならぬ事なるべし。這般の消息は、佐久間左馬太に解せじ。

▼佐久間が、無聊の餘りに、賀田金の周旋せる女を寵するは可なれど、夜間外出時の彼女が、臺灣總督府民政部の署名ある提灯を俥に用ふるは變挺なり。佐久間夫人なれば、尙僅に恕すべし、彼女は日蔭にある處の寵者なり、其日蔭にある處の寵者の分際で、民政部を濫用するは不屆至極なり。

▼提灯を濫用する尙可なり、停車場取締の巡査の行ふ敬禮を、出入毎に平氣で受けつゝある態度が無禮千萬也。

▼事は極めて些事なり、佐久間左馬太の知る事か、知らざる事かに關せず、筆にするだに大人氣なきも、燒きの廻つた佐久間左馬太が、這を我敢不關焉と、濟し込んでるからして不都合なり。

▼更に、臺灣民政長官時代の、後藤新平に就いて一言す。新平、亦、兒玉に讓らざる、突飛な行動を臺灣に殘したり。

△新平の長官時代の臺灣に、紳士らしき紳士なし。宴會に出づるも、公會の席に出づるも、喰詰者が、成上り者の跳梁跋扈する當時の臺灣に慨然たる新平が、時の臺灣銀行頭取として、添田壽一を拉し來りしは、其實銀行に頭取たらしむるを二の次とし、眞の目的は、渠れをして、紳士の手本を島人に示さしめんとしたるにあり。

▼之を以て、當時の臺灣社交界に、添田臺銀頭取の、全く出でざる事あらず。後藤新平の意味する目的が、大に達したるか、否かは知らねど、臺灣社交界に取つては、忘るゝ可らざる一事なり。

▼臺灣の極南打狗に平和街なる一廓あり。其何故に平和街なるやを問はゞ、答を得て啞然たらざる者は稀なるべし。

▼曾て、打狗市街に、猖獗を極めたる傳染病發生を見る。此處に於てか、勢ひ、此其一廓地のみに全力撲滅の必要あり、事偶々時の民政長官後藤新平の耳に入る。

▼新平思へらく。一廓地の家屋を燒棄するに非らずんば、其撲滅難からんと、遂に令して、病源地の一地に火を放たしむ。放火犯は、由來天下の重罪犯に該當す。而かも、其を官憲の命じて爲さしめたるに至つては恐らく臺灣植民地以外の處になかるべし。又後藤新平に非らざればなし得ざるべし。

▼之を以て、當時火に包まれ、其家財の、忽ち一爐の火中に消え去りたる

處の家人は、皆いふべからざる憂色を顏に見はせり。

▼然るに、令は突如として又下りぬ。曰く『悉に燒失する處の傳染病發源地の家屋は、全部官費を以て新築し與ふべし』何ぞ、其れ、令の奇拔にして、方法の行屆ける。驚喜は唯り燒かれし家の人のみでなし、打狗市民全體、否全島民全體之を傳聞して、新平の遣り法に悅服す。

▼斯くの如くして、悉に官命を以て燒かれし打狗市街中の一廓は、面目を一新して成りぬ。命じて『平和街』と云ふ。之に要する處の資力皆悉く、愛國婦人會臺灣支部の基本財產中より出づと。是れ、迄は、如何に、誰に聞かしても、立派極まる長官振りなるも、若し其れ、平和街なる、命名の由來を聞くに及んでは、啞然、又啞然、彼れ新平の、餘りに街氣多きに、呆れざるものなし。

▼更に平和街の平か、新平の平にして、平和の和が、同夫人和子の和の字より取り出し、其うして結合したるに至つては、其餘りに不眞目千萬なるに喫驚せぬ者なし。皮肉評をなす者曰く『あれは打狗の夫婦街である』實に後藤新平萬々歲の次第なり。眞似よといつた處で、之丈は內田嘉吉翁に出來ぬ藝當なり。

▼後藤新平に只感心な處は、無意味が、有意味が、兎に角、人を惠む點に在り。祝辰巳逝いて、彼の家の秋風落寞は、眼も當てられぬ有樣なり。殊に、將來の生活方法に就き、鳩首凝議中の遺族の憂色は極度なり。

▼之を見たる新平、忽ち惻隱の情を湧き起し『よろしい、其點は俺が引受けたから心配するな』で、日ならず、二三萬の大金を彼の遺族に贈つて、其家が、尙滿足に暮しゆける丈の方法を爲し與へたり。

▼祝は、後藤の舊部下なり、而して、其後援を得て、後藤の後を襲ひたる、臺灣の民政長官なり。然れども、後藤系より出て、後藤と性質の相似

ざる、恰も今の內田嘉吉對後藤を見る如き有樣なり。

▼祝は只、後藤の命に逆はらず、後藤の牽きつつありし糸の動きに依て忠實に其職に盡したる男なり。後藤と同じ、民政長官は勤めたるものゝ、後藤とは決して對等の關係でなし。故に後藤が其遺族を見る、亦祝其者を見る如き親みありたるべしとはいひ、二三萬といふ金は、兎に角大金なり。其大金を惜氣もなく、彼の遺族に與へたる後藤も、亦思ひきつた事を爲す人なり。之も、內田嘉吉には、出來そうのない事なり。

▼內田が、當初、臺灣民政長官として赴任當時は『馬車に据りがわるい』と言はれたり、其れが此頃では『貫目が少し殖ゑた故か馬車に据りがよくなつた』の評を受く。內田の爲に賀すべきなり。

▼任に居る益々長くして、輕きに失すと見らるるもの多き世の中なり。戯れにせよ、冷評にせよ、貫目が殖ゑて、馬車に据りがいゝの評語は少くとも、彼れの向上を語る天意人言に近し。

▼されば、とて、內田には內田の持長あり、好んで後藤式に倣はば、早晩の蹉跌を免れじ。只今日に於て內田の爲すべき事は、代々の前任者に依て爲されし、一切の瀰縫政策を、男らしく天下に投げ出すに在り。若し、之をしも、躊躇して、皿をねぶる猫の轍を踏む如き事あらば、天下の物笑ひなり。

▼前民政長官大島久滿次の末路は、欵を政友會に通じたるに崩し、而して、根を生したる臺灣の樂土を去らざる可らざるに至りたり。

▼聞說、內田現長官、亦近者、好みを政友派內の二三者に通じ、私に臺灣統治の後援たらしめるとは眞か。

▼內田の親分系にして、臺灣植民地の舅たる、官僚系の後藤と、此官僚系の政敵たる現內閣の一部を代表する原敬とか、同じ東北出身者にして

犬猿尙如かざる如き關係は、內田嘉吉の、極めて能く知る處なり。然るに、彼れにして、今政友派に意を通ずる如き說を傳へらるゝは、彼の爲に遺憾とする處なり。

▼內田が、長く臺灣の爲政者たるに意あるか、なきかは別問題とするも、後藤系としての渠れが近來の態度に慊らざるもの、決して吾人のみに非らざるべし。大島久滿次の二の舞を演ずるなきかは、渠れを最負目に見る人側にもあり矣。

臺灣の俳天地

▼世が進めば、俳諧も進まねばならぬ。進むといつては、少し語弊があるか知らんが、兎に角膨脹の意味が、其處に現れて來らねばならんと思ふ。『俳諧手提灯』や、『明治五百題』や、『俳諧歲事記』を唯一の道しをりにした時代と、今は時代が變つてゐる。

▼さらばどう時代が變つてゐるかといふに、第一動物からいつても、植物からいつても、器具調度、衣服からいつても風俗、習慣からいつても、日常の生活からいつても、俳聖芭蕉全盛時代の俤が全くない、乃至俳仙、蕪村全盛、時代の俤がない、俗の儘の人が、深川に芭蕉庵でも建てゝ、頭陀袋、檜笠の扮裝よろしく奥の細道でも分け入らう者があれば、直ぐ半狂の評判を取る。俳趣味と、時代の變遷は愕くべきものだ。いはゞ、現代は、昔の姿の儘で、今樣ぶりの息を吹き込む俳手段が必要であると共に、洋服姿の儘、算盤手にせる儘、鍬鎌を手にせる儘、風流に遊ぶ時代になつたのだ、退歩か進歩か其れは吾人に解らない。

▼殖民地の數からいつても、最も古い方での北海道、臺灣、若くは樺太、關東洲、朝鮮といふやうに、殆んど本土の面積に拮抗する程になつた。從

て俳諧の天地が廣がつた。氣候からいつても動植物からいつても、又此他のものからいつても、日本在來の歳事記や、古人の句に作例のない事が山程出來て來た。殊に極寒の樺太、酷熱の臺灣の如き俳天地には、自ら異つた俳趣味がある。同じ竹を句にするにしても、同じ松を句にするにしても、內地の其れと全く趣きが異つてゐる。其れをしても內地の考へで句にすれば全然感じのない、魂のない句になつてしまう。滿洲、樺太の事は兎に角、臺灣俳天地に就いて少し語つて見よやうと思ふ。

▼嚴格な意味でいふなら、臺灣、卽ち、南日本には、冬といふ季節が全くないやうに思はれる、隨て秋から冬にかけた內地の季節になつてもの悲しいやうな、うら寂しいやうな、木葉凋落の光景が見られない。隨分寒い時もある、けれども霜を板橋に見られず、雪を松が枝に見られず、雪と、

霜とは、臺灣に、全くないといつてもよい位である。もし雪、ありとせば、其れは中央山脈の新高山とか、阿里山とか、シナクレ山とかの絕頂位なものだらう。其れ故南日本の俳句には、雪、霜など云ふ句の感じが殆んどない。若し西行を臺灣に生れしめたなら、あんな厭世的詩人にはならなかつたかも知れぬ。

▼臺灣は常夏の國である。陽氣で、年中汗を流し通しの天地である。寒い日に牛鍋をつゝいた處で、湯豆腐で一杯きこしめした處で、內地のやうな風味が掬されない、お正月の元日を浴衣で、瓜もみや、茄子の鳴燒で、麥酒を飲んで新春の萬歳を祝する事などは珍しくない。だから臺灣の俳句には、自づと其傾向がある。及全島內の植物を見た處で、松や杉は鉦太鼓で探して、僅に蒂界の深山に求めうる。これ以外の地には全く見たくても見られない。

▼いはゞ臺灣は植物の臺灣である。全島到る處鬱蒼たる草木の色に彩られぬ處がない。內地なれば春の初めの草木の綠は、淺綠りであるのに、之は直ぐ深綠になる。そして、葉に厚みがある。どつしりとして重みがある。隨て、同じ芭蕉の句を作つても內地のとは、頗る趣きが異ふ。殊に臺灣では芭蕉を觀賞植物の中に入れぬ。內地なれば、庭園の隅か、書齋の窓下へでも植ゑる其れを畑に作つて居る。だから、臺灣の芭蕉を句にするなら、赤い、濃い、色の花がぱつと咲いた後で、芭蕉實が累々と實り下つた光景とか、又は其破れ葉に、淅瀝の風聲でも聽く趣を作ねばならん。內地では一株か、二株より植ゑないが、臺灣のは林になつて居る。そして其葉に完全なものがない。風の強い爲に皆破れてしまうのだ。例を一寸芭蕉に取つても、臺灣と內地とは、是れ程の相違がある。

▼內地なれば梅雨は、五月頃と定つてゐるから、五月雨ともいふが、臺灣の雨季は十月頃から翌三四月迄になるので、一寸半歲ばかりの間雨がしと〳〵と降りつゞく。

▼之が臺灣全島かといふと、然うでない。單に基隆を中心とする北部臺灣ばかりである。內地から船に乘つて基隆へ其時分行くと、每日每日雨である、其雨が大雨でない。所謂糠雨といつたやうな、日本內地なれば、春雨と、五月雨と一緒に揑ねかへしたやうな雨降で、家々の干物は、皆火で屋內で乾かさねばならないのだ。

▼然うかと思うと、南部臺灣へ行くと、北部臺灣とは全く反對の結果になつて、北部に雨の每日降る頃、南部の天は每日から〳〵と晴れ渡つて、雨などは藥にしたくもない。

▼此原因は、全島に馬の背のやうに走つて居る中央山脈に、季節風の當

ると、當らない關係がら分れるので、此南北天候の相違は、五、六、七、八、九月頃の全く季節風のない時になつて平均し、漸く一つになるのが普通になつて居る。

▼恁ういふ次第で、雨といふものを句に作れば、矢張此心もちになつて、此感じが句の內容に藏まらねば句の價値がない事になる。

▼だが夏季には驟雨がある、此又驟雨の光景の猛烈さは、到底內地の驟雨と比べものにならぬ。熱帶地にして、初めて見る事の出來る壯觀、雄觀の極を盡した光景であるから、句にも其光景が躍如として現はれねばならぬ。

▼風にしても其如く、臺灣の風は、非常に威力がある、非常な破壞力がある、若し其れ一陣の怪風天の一方に吹き起る時に於ては、家を倒し樹を倒し、人畜を殺傷し、あらゆる被害を與へる中にも、砂塵飛揚の光景が、如何にももの凄い。之は熱帶地臺灣でなければ見られない事だらう。彼の紅塵萬丈といふ形容詞は能く之にあてはまる。しかし臺灣の風に。春風とか、秋風とか、木枯しとかの名稱の不適當な事はいふ迄もない事、いはゞ臺灣の風は、只風といふ外に、內地式の名稱がつけられない。著しい特長をいふなら、夏の涼し夕風のみが、內地一倍に涼しい位の事だらう。

▼其れから雲の峯の雄大な光景も內地一倍である。一體が臺灣には水蒸汽が多いから、雲がいろ〳〵に變化する、其變化が悉く雄大で、且つ美しく、壯嚴の美を盡し、通常の繪の具の色では、殆んど形容しきれない光景が夏は殊に多い。支那の詩人の夏雲奇峯多しは、日本內地の其れよりも、寧ろ臺灣の夏になさはしい形容詞である、之が支那なれば、略ぼ臺灣の氣候と同じやうな南淸の其れにあてはまる。

▼日本内地の俳聖蕉村は『日を帶んで芙蓉傾く恨みかな』と芙蓉を句にしてゐるが、臺灣の芙蓉には、斯ういふ感じが少しもない。若し蕉村が今人であつて、此句を作つたとしたなら、狹い俳天地の、俳材に貧亡なる、小俳人の譏りを免れなかつたらう。俳行脚の功德は、恁んな處にあるのだ。旅行嫌ひの其角にすら、『新山家』の一書があるでないか。

▼臺灣の芙蓉は內地日本の其れの如く、なよ〳〵として、嬋に風情あるやうな性質のものでなく、かの梧桐の如く、丈高く中天に聳えて、其れが風にあたれば、啾々唧々の響きをたてゝ春眠、秋眠をうち破る。之は內地日本の芙蓉に、見ることの出來ない光景であらう。つまり寂趣味でなく、稍雄壯な趣味があるのである。

▼稻に就いて見ても其通り、臺灣の稻は二期に亘つて收獲する。

▼第一期稻は、之を早稻と稱して、其收穫期を頂冬、又は早冬と稱して、舊六月中に刈り入れる。隨て日本內地の秋收穫が、之は眞夏になる。

▼其れ故第二期稻は、晩稻といつて、收穫期を、晩冬、又は下冬といつて、舊十一月に收穫する事になる。

▲牽牛花のやうなものになると、種さへ蒔けば、芽が二三日中に出る、其れが蔓になつて花になるのは瞬く間である。其れ故、花が散れゝば又蒔き〳〵春の暮から、夏より、冬へかけて、幾度も〳〵美しい花を見れるやうな次第で、之も內地日本の朝顏を見るのとは、感じが大に違つて居る。

▼支那人の詩に、綠竹猗々たりとあるが、此綠竹猗々たりも、臺灣の竹にして、初めて見る事が出來る。第一臺灣の竹は葉が細かい、其して枝と枝の間がこみ合つてゐるから、其れが風にすれ合つて搖ぎでもすると、全く綠の連の寄する如くある。

▼加之、臺灣の竹には針のやうな小枝がある、其小枝から、筍のやうなものが、絶えず出てて居て、其れが皆枝になる。其うして根株が非常にでかくなる。形をいふなら、五本か、三本の竹の根が踞つたり、蟠つたり、一つの大きい樹の根のやうになつて居る。故に此根を取つて、いろ〳〵な、大きい竹の細工ものが出來る。

▼勿論臺灣の竹には、種類が澤山あつて、一概にばかりいへない點もあるが、唯竹の多くが、昔鄭成功、即ち國姓爺の命として、家の圍ひ、つまり警戒の意味から、墻壁代用に植ゑさせた傳說などもあるから、恁ういふ心もちを前いつたやうな考で句に詠まねばなるまいと思ふ。

▼其れから、終りに臨んで、もう一ついふ事は、臺灣北部植物の代表（俳句的）にともいふべき相思樹と、南部臺灣を代表（俳句的に）すべき綠珊瑚の事である。

▼相思樹は、常綠喬木で、內地人は、之を臺灣柳といつてゐる。此樹は支那時代の巡撫劉銘傳が移植したものだが、此又繁植がすばらしいもので、北部臺灣の山野でも、市街でも此樹木を見ない處がない。殊に、街頭の風致樹となつて趣きを非常に添へて居る。

▼綠珊瑚は、南部臺灣の一地方に澤山ある。一見綠の珊瑚のやうに、夏になると、其刺腋から、大形で白色の螺旋狀の花を開くか、一寸見ても枝ばかりで葉のないやうな樹木である。つまり仙人掌科の一植物で、肉質であつて、枝卽ち葉に手を觸れると、ほろ〳〵に折れる。南部臺灣の極地打狗港口に聳ゆる旗山は、滿山、此特殊植物が、岩石屑の不毛地を飾つてゐて奇觀を極めて居る。

▼此兩植物を較べて、臺灣南部の自然の、相違を研究すると、他に見られない、其處に一種の俳趣味が湧いて來る。此植物の異る如く、臺灣の人

と、天然にも著しい相違があるのである。

▼其處で、臺灣の北部からは、新派俳句の機關として『相思樹』が出て南部臺灣からは『綠珊瑚』が出て居ると云ふ如く、臺灣には、此他尙內地日本で見る事の出來ぬ新歲時記の資料が多いのだ。

臺灣紳士の宴會

藝者を通し、乃至は宴會を通し、所謂臺灣紳士なるもの、趣味と人格を見るに、其處に極めて興味ある問題が湧いて來る、手ッ取り早い註文をいふなら、第一に宴會の風を改良して貰ひたい。一方には秩序が立つたとか、民政の統一が出來たと云ふ癖に、唯り宴會のみが留植民地の儘なるはどうだらう。臺北中の藝者や仲居に、宴會の作法を心得た者の少いのはどうだらう。其れも、之れも、宴會は唯酒を供し、肴を供し、之につやッぽい者を加へて、無暗に騷げばいゝと云ふ定義の穿き違ひから出來たもので、宴會は表向きのもの、終れば限つて、二次會がある、三次會がある、藝者や、仲居が、腕に絡かくるは之からと解釋するのが、抑の間違ひである。

隨て通常宴會には、寢るを意味する、飽つぽいもののみが侍る。侍べるもいゝが、自分の好いた人の側ばかりに膠著く。加之、彼等は自分勝手のことばかりを並べ、砂糖屋さん以外、お役人樣以外のお客をお客と思はぬ惡弊がある。座も白け、興味も索然たらざるを得ないでないか。臺北檢番中には客の扱ひ、座もちのいゝ妓の五人や、三人決してない譯でなければ、臺北の藝者といはず、仲居といはず、此他のものといはず、宴に列し、客を面白く遊ばせ、可笑しく興せしむると云ふには、どれも、之も無資格のものばかり多いには愕き入る。

今の臺灣は、十年前の臺灣でない。五、年前の臺灣でない。砂糖さんと、お役人ばかりがお客樣でない。料理屋の品位を重もんじ、藝者仲居の資格を高めて、家庭以外の紳士に紳士らしい遊びを敎へるとならば、宴會の方法をも少し改良して欲しい。南勢街や猫卿と、何等擇ぶ處なき臺灣の料理屋、及、藝者、仲居の態度に眉を顰むるもの、豈、只、內地の旅客のみではないだらう。さりとて肩衣つけ、道德經讀んで宴會に出でよとは、いはんが、公の宴會なるものを、尙更に高まつたものにしたいと思ふ。同時に、一方には宴會に列する時間の厲行、杯の献酬、無暗に席を起つ惡弊、初對面の藝者に名刺を求むるが如き無作法を廢止したい。宴會の風儀の改良については、料亭にも、藝者にも、仲居にも、お客側にも、理由はある。しかし宴會の風をお客が左右するといふよりも、料理店や、藝者仲居が唯唯諾々として求めに隨ふから頼れるので、二次會、三次會は兎に角、公むいた宴會丈には、少くとも料亭と、藝者と、仲居の品位を維いでゐて欲しい。

若し、更に進んだ御注文をいふなら、藝者や、仲居に食物鑑定の心得、平たくいへば料理の心得があらせたい。此點に於て灣藝者は大半零である。落第である、藝者にして、味の素を知らない位ならまだしも、鯛のうしほを知らん者がある。出來た其ものを見て始めて『これならば知つてますわ』に至ては、可愛いそうが通りぬけて寧ろ情けなくなつて來る。女紅場に集めて三味を鳴らさすもいゝだらう、振り事を敎へるもいゝだらう、しかし灣藝者が今日の急務は、料理趣味の涵養と、起居動作のお稽古であらう。舞と踊りが起居動作の基をなすてふ言が若し眞なら灣藝者はもつと淑やかなるべき筈であるに、其れが現在事實に現れて居ない。

臺灣の南方思想

▼南部へ行くと、砂糖屋さんでなくば人間でない位に解される。ローズバンブーが何であるか、カムチャが何であるを知らんで、南の藍者紹に敎へられし內地新來者もあつた。

▼何がさて、砂糖屋さんの全盛は結構だ、砂糖屋さんでなくば人間でない位に北部でも解せばいゝ、臺灣は砂糖島でないか、其砂糖島で砂糖屋さんのもてるは不思議でない。僕は未だ〳〵今の分位ではもてやうが足りんと思ふ。少くとも臺灣全島の女達が砂糖屋さんでなくば、娘も與らない、聟にも取らない、交際もしない、相手が砂糖屋さんなら、生命も何も、要らないといふ程度迄にならせたい。さうして臺灣を日本の砂糖島でなく、世界の砂糖島にしたい。恁うなつたが最後、爪哇糖が何んのかんのといつた處で、もう灣糖の敵でなくなつてしまふ。筆が一寸横道に入つたが、南方と、砂糖屋さんとは、斯く迄深い關係がある。其れが今日の南方思想を生んだのだ。

▼しかし、別に南方思想、北方思想といふ事が世の中にある。南人に南人特有の思想あれば、北人に北人特有の思想がある。老子、莊子は、支那南方の人であつたから、自然の感化せる南方の思想を代表して、精出世間的であつた、孔子や、孟子は、支那北方の人であつたから、其自然の感化上世間的であつた。其處で一が空想的であるに反し、一は實際的であつた。

▼我日本にした處で、南方の音は典雅流麗である。北方の音は荒涼悲壯である。北海を代表する『追分節』と南海の果てを代表する『琉球節』とでは、天地霄壤の差のみでない。其れが皆人文發達上に現は

れて居る。

▼然るに臺灣はどうあるかと云ふに、臺南が鄭氏三代の舊都であつた時代は兎に角、臺南を中心とせる現在の南部は世間的で、實際的で、支那、及日本史の說ける其れに反對の現象を形つくつてゐる。

▼旗亭に女の唄ふ聲を聽くも、婆娑たる柳子樹林の風に聽くも、南方の音は荒凉悲壯である。況して落日の赤嵌樓上に立ち、北の方遙に、大南門の殘壘を望み、離々たる草裡に五妃の墓を見る時、誰か南方の荒凉に泣かざるものがあらう。

▼思ふに臺灣南方の民の思想は、天幕の民、城壁の民、遊牧の民たるアラビヤ半島の民其儘の點がある。其れも之も領臺後の文明が北から南に逆流し、其古へ文明の呑吐港だつた安平と、基隆の位置が代つて、北方の自然が、南方の自然以上に進んで、北方の首府臺北が、政治の臺北人の臺北、座らにして南部の產業を左右する臺北になつたからだらう。

▼いひ換ふると、臺灣の南北思想の相違は、天然の感化を、人力を以て破壞した事になる。是れ慥に人力の勝利である。人力の勝利は即ち智識の勝利である。智識の勝利は學術の勝利である。學術の勝利は文明の勝利である。之が臺灣に於ける南北思想の結論になるやうだ。

詩的なる門聯研究

臺北の土人街を通つて、先づ人の眼を惹く門聯が年々少くなる。殊に迎春の爲每年其歲暮に於て取換ふべき其れすら、二年も、三年も前の儘で、風雨に色の褪せたのが漸々ある。更に顧つて、斷髮、改裝を見ると其處にある意味の祝すべき事があるやうにも解される。舊慣の破壞も其一つであらう、總督政治の普及も其一つであらう、此意味からして次

第に氓びゆく門聯の變化を一寸調べて見た。

大稻埕と艋舺、住む人の階級と、生業の異る故か著しい相違がある、大稻埕のは直截に露骨で、思ひきつて半廣告の意味、看板の意味になつて居る。例へば書房であると『文章舊價鬻腋に留り、風雅新に傳はつて鳳池に入る』酒舖であると『美味偏へに招く雲外の客、清香能く引く洞中の仙』弔祭であると『杳々として双親復た見ゆるなく、哀々の兩字聞くに堪へず』等題する其れが明かに家の内面も語れば、營業の何であるかも說いて居る。

艋舺になると之と聊か異り、鍛冶屋の軒頭に『天皇國の爲に始めて禎祥を產み、地は人文を興し先づ氣象を挽く』船宿の門扉に『門に迎ふ春夏秋冬の福、戸に納む東西南北の財』雜貨舖の店先に『一統せる太平眞に富貴、九重の春色大文章』飲食店の入口に『春色座に入つて三陽泰らかなり瑞氣門に滿ち萬象新なり』など無茶な門聯が見える、此等から見ても艋舺、及大稻埕の文野の程度が判斷し得る。

しかし何れを見ても佳字、麗句、現世では所詮希求し得られない對句である、殊に雨漏り壁破れ、蟋蟀尙白晝に唧く廢屋同然の家に『帝德巍峨として五師を追ふ、皇年永久三皇に擬す』とか『國泰くして天開く不老の春』など云ふ瑞氣洋々たる雄大なる春聯を見る時、詩人は何と歌ふであらう。哲人は何と解釋するであらう。更に此萬戸必ず貼すべき、敬すべき門聯が一枚一錢か、二錢で書舖の小僧の書くなるを知つた時、興ずる者はどんな顏をするだらう。舊慣は破れても、すべての精神は母國に捧げても、門聯の詩美丈は臺灣に殘し置き度いと思ふ。

一歩進んで朝鮮の門聯はと見るに、之も亦臺灣若くは對岸の清國同樣であるが、中に經書から取り出す、こつ〳〵した理窟の句が多い、つまり

格言的、座右の銘的のものが多い。例へば『德孤ならず必ず隣あり』とか『大學の道は明德を明にするに在り』とか『民德厚きに歸す』とか云ふ類で、叙景的のんびりした、長閑なものが稀れである。唯どうかすると山村の酒幕などの紙燈に『酒家何處の方に在りや、牧童遥に指す杏花の村』などの風流文字もあるが、先づ〳〵概して、修養の文字を門聯にする更に云ふと清國、及臺灣の叙景的なるに反し、朝鮮は叙情的なのである。故に歩を進めた研究に依つて、三地の門聯を見る事の甚だ有益で、興味ある事を告げて置く。

附錄　終

明治四十五年六月十六日印刷
明治四十五年六月二十日發行

解剖せる臺灣
實價金壹圓

著作者　西村才介
東京市本郷區弓町一丁目三番地

發行者　津端武
東京市麹町區飯田町二丁目六十八番地

印刷者　遠藤廉治
東京市麹町區飯田町二丁目六十八番地

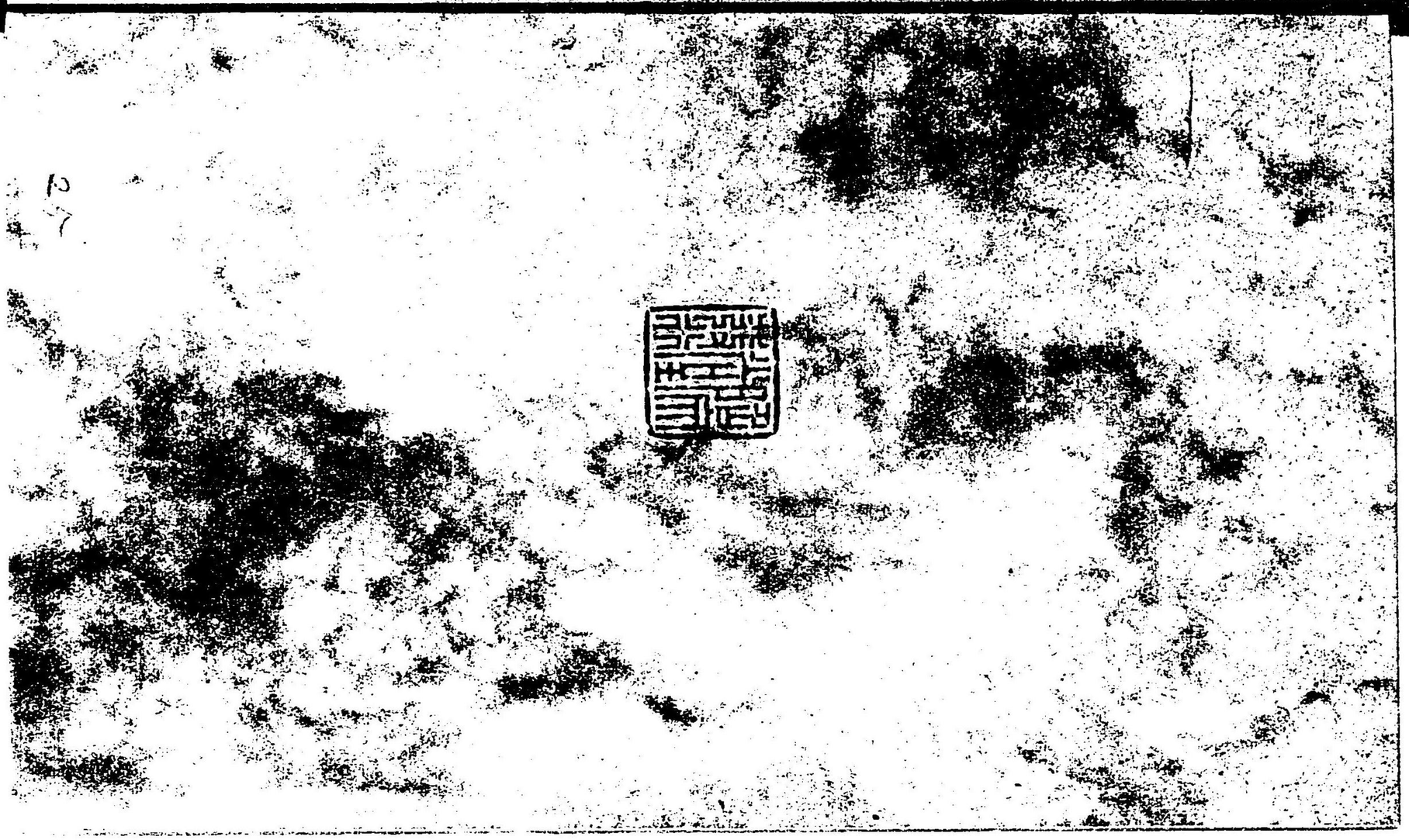
印刷所　公木社

著作權所有

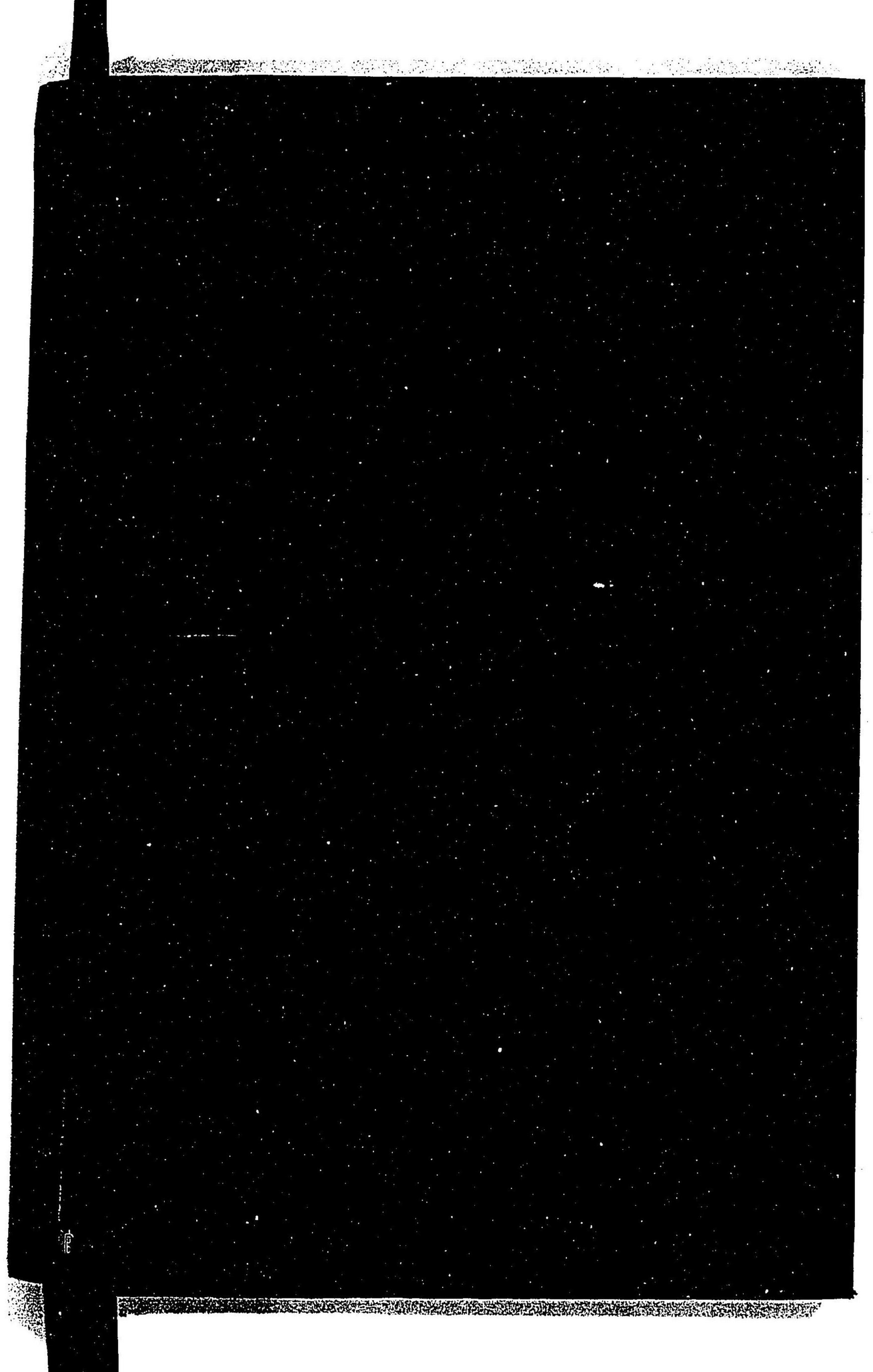
發賣所　東京本郷弓町一丁目三番地
振替口座　東京七六七四番
昭文堂
電話下谷三四四一番

042
153

4



342
153



026483-000-1

342-153

解剖せる台湾

西村 才介（南溟漁人）／著

M45

ADD-0143